

『漢方の臨床』

第13巻8号、第13巻9号

編集長(秋葉哲生)の撰ぶ、重要記事ふたたび。

漢薬を語る

— 京都木屋町にて —

道修町の今昔くエキス製剤出現前夜くはやる漢方薬局とは

出席者…長倉音蔵・木村康一・高橋真太郎・坂口 弘・西岡一夫・氣賀林一

(*本稿では2020年現在使われない語句も散見されるが、発言者の真意を伝えるべく編集者の責任で可能な限り旧稿を存した点をこ了解願いたい)

まえがき

本稿は、去る五月十五日、京都市木屋町三条上ル、日本新薬寮の一室で開かれた本協会主催、「漢薬を語る」座談会の記録である。

出席者は大阪、長倉製薬社長、長倉音蔵氏、京大薬学部教授を停年退職され、現在富山大学薬学部教授附属和漢薬研究施設長の薬学博士木村康一氏、同じく阪大薬学部助教、京都薬大講師、薬学博士、高橋真太郎氏、漢方臨床

家、医学博士、坂口弘氏、近畿漢方研究会の西岡一夫氏で、小生氣賀林一司会で行われた。

○

その日、私は十時五十一分着ひかりで京都に降りたが、雨が降っていて、駅はたいへんな雑踏。何ごとかと聞くと葵祭りだという。三十分ほど並んで、やっと順番のタクシーを拾うと、一路座談会場へ向かった。

車の中から京の町を眺めていると、祇園祭りなら鯖寿司だが、葵祭りには付きもののちまきを食べながら祭りを見物した遠い中学生のころが思い出されてなつかしかった。

座談会は二時から始めよう、と一切のお世話をしてくださった高橋博士のご通知であったから、それまでにはまだ時間があるので、宿に荷物をおいて附近の散歩に出かけ

た。
 すぐ近くの先斗町、歌舞練場には鴨川をどりがかかっていた。かかっていたという、古めかしいことばだが、帝劇の前を通りかかった田舎のオツさんが、これが有名な芝居小舎か、と言ったというその小舎こやということばがうれしい。

そんなことを思いながら、さらにぶらぶらしていると、いくらかおながすいてきたので、この辺にどこかうまいそばやはないかと道で聞くと、「小槌」といううちを教えしてくれた。そこへ入って、むかしなつかしいきつねどんぶりとうどんを食べた。京都のうどんときつねどんぶりのうまいこと。この二つは私の味覚のふるさとである。

時間がきたので、宿へ帰ると、すでに長倉、高橋、西岡三氏が来ておられた。なおご出席予定の木村、坂口両氏は、ちょうど朝比奈泰彦先生が武田薬品工業株式会社京都試験農園に来ておられて、面会しておられるので遅れるということであった。

それでは、というわけで、さっそく座談会を始めることにして、まず、長倉社長からクスリの街、大阪道修町じょうまちの今昔についてお話をうかがうことになった。

道修町界限、まずそういつたところから、この座談会がはじまる。(気賀)

十三年、高等小学校を卒業した年の秋でした。それは道修町の浪花橋筋の西北角に須藤友七商店というのがありまして、そこへ入店したのであります。

それから大正四年の六月に薬剤師検定の実地試験に合格しましたが、ちょうどその頃私の勤めていました須藤商店は整理をしなければならぬ立場にありましたので、そこをやめてその年八月に今の武田薬品工業、その頃は武田製薬所と言っておりましたが、その武田の研究室に入ったのであります。この研究室は当時武田二郎先生が新しくおつくりになったのであります。

気賀 その武田二郎さんという方は？

長倉 先代の武田長兵衛さんの弟さんです。この方は長井長義先生の門人で、いわゆる帝大の銀時計組です。ひじょうに優秀な方でした。まずこの方あたりが関西の薬学者の大御所ですわ。そしてこの武田二郎先生の研究室へ当時入って来られたのが、今の朝比奈泰彦先生のお弟子第一号と言われる東大出の三宅薫博士でありまして、二郎先生の研究のお手伝いをしておられました。この三宅さんがいまの武田薬品の最大の功労者で現在は顧問になっていられるわけです。

それで私は大正九年まで武田さんにお世話になっておりまして、大正九年から自分で商売を始めたのであります。

気賀 それではただいまから座談会を始めさせていただきます。

大阪の道修町と申しますと、だれでも知っておりますように、クスリの間屋街で、古来連綿長きにわたって、由緒ある多くのクスリやさんが軒を並べているところであります。それで今でもこの道修町を通りますと、近代建築の中にもそういう古い伝統の息吹が感じられるのであります。

そこでまず最初にこの道修町に育ち道修町で成功された長倉製薬の社長長倉さんに道修町の今昔といったようなこととお話ねがいたいと思います。

つまり伝統あるクスリ問屋の道修町には、いわゆる浪花商人のド根性と申しますかそういうものがあって、業界人として修業し、一人前になるにはその世界でなければわからないきびしいものがあつたと思われるのであります。

それで、道修町のそういう義理、人情、そして意地といったようなものを古くからじかに肌に触れて来られた長倉さんに、業界人として道修町でいかに修業され、いかに今日をなされたか、という想い出話を承り、それをこの座談会の序論として、ひきつづき本論に入りたいと思っております。どうぞよろしく。

長倉 私がはじめて道修町で小僧に入りましたのは明治四

そんなわけで私は武田さんには大正四年から九年まで五年間いたわけですが、明治の末年から大正初期にかけての道修町の記憶は私にははっきりしておりますので、その間の道修町のことについては人の移り変わりなどよく知っておりますつもりです。

そこで、その頃のはなしになりますが、いま道修町へおいでになりますとわかりますように、建物はむかしと変わってすっかり高層建築になってしまいました。しかし道路は今もそのわりに狭いですが、明治四十三年ころの道修町の道路はもつと狭かったです。それで当時はもちろん自動車などはございませんでしたので、馬車で荷物を運んだものですが、その馬車でさえクスリなどの荷物を馬車で運ぶなどということは大問屋のすること、一般は肩曳びききの荷車で運んだものです。

気賀 つまり手ぐるまですか。

長倉 手ぐるまといつても一本かじ棒のついでいる車で。かじ棒をにぎって、引なわを肩にかけて引くのであれを肩びきと言ったようです。ところが、その肩びきの荷車でさえ道路ですれちがうときは、路が狭くて、おまけに軒並みにクスリ問屋では荷物が外にはみ出して積んであるので、そういう荷物をどけてもらわんと車が行き違えないほど道が狭かったのです。そしてもちろん舗装などしてな

かったのです。

そこで当時これではいかんというわけで当然道路拡張問題が起ったわけですが、それは道路の拡張とはいわないで「軒切り」といいました。出っぱって邪魔になっていた軒を切るべしということです。つまり道路へ軒が出張っていたので軒並みにそれを切らせて一尺五寸ぐらいの軒にさせ、家も両側とも一間ずつ後退させたのですから、それでいくらか道路が拡張されたということになるのです。しかしその少し前に第五回勸業博覧会が大阪で開かれ、大阪の道路はすべてもう一間道幅を広くするという都市計画が発表されたためとも思われます。

私が入店した当時、丸善と田辺と小西儀助さんの店は新築されていてその三軒は道路より一間うしろにひっこめて建てられていました。そして大正十二年でしたか、私が武田をやめてから今の武田の店も新築されたのです。それまでは西側の軒下で、おっさんが毎日カラ臼で米をついていました、なつかしい思い出です。

そのころの道修町のクスリやの店というのはもちろんすべて木造の二階建てで、これはいまでもそうですが、すべて奥行が深いのです。そして軒先がひくくて、家の中はうす暗かったのです。殊に二階の表側はひくくて、小柄な私でさえ頭がつかえるほどでした。そして二階の窓はみな土

格子になっており、下の入り口はみな揚げ戸で、くぐり戸がついていました。そして戸袋の内側には簀戸と板戸がついており、簀戸だけをしめるのは節季とか休みの日だけでした。

それから、表には、どの店にも「揚げ店」というのがあって、これは店先の床几のようなものです。その揚げ店の上に「出し櫃」といって仙花紙を貼った白い箱が置いてあったのです。それにはそれぞれの屋号とかマークが書いてあったものです。「出し櫃」の中にはマニラロープとか古新聞、瓶札など荷造り用のものが入れてありました。どの店にもこの出し櫃が置いてあって、これは道修町の一つの名物であったわけです。

それともう一つ名物のようなものは、クスリの荷造りや、袋込みの小分けのとき、上りかまちや量がいたまないように牛の大きな二枚皮が敷いてあったことです。敷き皮と呼んでいました。

ついでに店の中のしきたりですが、図で示しましたように店の正面に結界、つまり仕切りの木柵があって、その後ろに机があり、その横に帳棚とか見本棚が置いてあり、これは主人または大番頭の座る位置で、武田では当時、矢野丑太郎さん、田辺では森下卯三郎さん、塩野では沢田さんがそこへ座っておられたのです。ここで仲買人を相手に大

問屋さんが大卸しの商売をするわけです。そして店売りは、さきほど申しました揚げ店の前にタバコ盆とか火鉢が置いてあって、そこで客に応待するのですが、そこへ座る者は武田とか田辺さんのように大きな店では二人、ふつうの店では一人です。そして主人が息子を仕込むようなときは主人と息子がそこへ座るのです。そして、私どもが買いたいものに行くときはそこへ腰かけて「せり買い帳」を出して商売をしたものです。つまり現在のように伝票でものを買うということはありませんでした。

売り手を「店売り」、買手を「店買い」と申しまして、店買いが地方の薬店の注文を一々買物帳という小帳面に書いたものの中から、「店売り」が自店にある品物をせり買帳に品名、数量、単価を記入します。これを店買いがそろ盤をはじいて「まけとけ、まからん、こんど入れ合せしたるがな」などとやりとりして、きまった値段を記入して、丸の中に「極」と書いた「きめ判」をおすと、それで商談成立です。

そのかわり、あとになって、そのとき取引した値段の品物を渡さなかったりした場合は、その店は面目を失墜するわけで、その点きびしいものでした。

それから、大きな商いをする場合には、「請け」というものがあって、買う場合には、「買い請け書」というのが

あって、これは仲買が発行するのです。そして、その仲買つまりブローカーも、勝手に仲買にはなれなかったのです。

つまり仲買人になる資格というのは、まず「みせうち」(店内)という大仲間の卸業者の店に大体十二年以上勤務した者で、その主人の保証すなわち承諾書をつけてもらわなければならないのです。十二年とは長いようですが、義務教育尋常四年卒業は十二才ですからね、それで小僧に出てくるのですから。そして大仲間組合へ届け出て、その組合の認証を得ると、その組合(住吉組)の師匠格の人の裏書印を押した請け証をもらって初めて仲買人となるのです。

そして大問屋には「請け箱」というものが置いてあって、商いが成立すると書いた請け書を番頭に渡すと、OKなれば番頭がその中へ入れるのです。そして節季になると、その書類を整理して、問屋からそれに対する口銭をもらうのです。そしてその利益をたとえば自分の師匠とか仲間と二人で折半するときは、二人の名前を書いてマルに棒を入れた符帳を書いておくのですが、それを「マルボー」と言っておりました。つまり利益折半のしるしです。

友達と割勘(半分ずつ出し合って)で遊びに行くとか進物など共同する時は、「オイ、丸棒でいこう」といいま

した。それで仲買人として一人前になるまでは師匠につき添ってもらわなければならないので、仲買いの取引はいつもの「マルポー」で、師匠と利益を折半しなければならぬのです。師匠の顔が広いと、商いの口も多く、芸妓や舞妓さんのお目見得のようなものですよ。

それから「祝儀商い」というのがあります。正月の初商いあきんのときは「寸珍」というものを問屋さんからもらったものです。これは和漢薬屋に限って、今でもあります。

気賀 なんですか、その「寸珍」というのは。

長倉 それはその問屋で手持ちになっている商品とねだんが書いてあるものです。たとえば、漢薬問屋の三国仁兵衛さんのところにはこれこれの品があるとか、菅井豊三商店にはこれこれがあるというようにそれぞれの問屋のストック品とねだんが書いてあるわけです。それを仲買人が買手に見せて注文を受けるわけです。大問屋は仲買人の寸珍によって「請け」を入れて商取引をやるし、一般のクスリやはせり買い帳で商いをしたものです。ですからこの店へ行っても、せり買い帳と判取り帳は並べて柱にかけてあったものです。

気賀 なぜ寸珍というのでしょうかねえ。

長倉 それは私にはよくわかりませんが、これは正月の商いの初めるとき仲買人が大問屋へ行ってもらってくる在庫品

目録というわけですが、どういう意味か、とにかくその帳面は紅白の水引でとじてあって家紋に寸珍と書いてあり、裏にその問屋の屋号が書いてあるのです。そしてそれをもらうときは店先でごまめとか数の子とか、そういうたたかんだんな正月料理で一杯ご馳走にあずかるのがしきたりでした。一杯のんでほんのり酔ったところでポン、ポン、ポンと三度手を打って景気をつけて帰るのです。

お正月の初商いと、仲買人が師匠につれられて初めて挨拶まわりをする初廻りとは、さし当って要らない品でも、師匠の顔を立てて、また母家の顔を立てて新仲買の将来を祝う意味でつとめて御祝儀あきないをしたものです。

西岡 するとたとえば広南桂皮がAの問屋にもある、Bの問屋にもまたある、C、Dの問屋にもストックされているといった場合、仲買人の出身がたとえばBの問屋の系統であったとしますと、すこしぐらい値段が高くてBの問屋の品をつとめて動かすようになり、そういうことがたび重なれば、Bの問屋代理店というか、手先というか、そうなるってしまうようなことはありませんでしたか。

長倉 まあそういうことはあるでしょうけど、そこは商人仲間の道義の問題で、たとえばその仲買人が三国さんの出であった場合、その広南桂皮が三国さんにもあるのにかかわらず、うちの広南桂皮をとり引きしてくれたということ

で喜ばれる、また三国さんにならない品物の注文があった時は他の問屋で無理を聞いてもらわんなんともあるわけです。そこに人情と道義のきびしさがあるわけです。

気賀 それはいいことですね。そこに浪花商人の根性があるわけですね。

長倉 つまり主家も立てる、他へも立てるということで、またこんどはほかのことで無理がきく、というものですよ。

気賀 それが商売というものでしょうね。

西岡 だから仲買人として主家も立てるけれど、その所属の系統に寄りすぎてもいけない、言わば着かず離れずの立場で商いするのがいいんでしょうね。

高橋 その点はいまお話のように大きく見れば問題ではなかったかも知れませんが仲買人の身びいきというか、そういう傾向はあったんです。つまり古い封建時代の徒弟制度というか、それらのものと新しい時代の商売に移るいわゆる過渡期にあったわけですが、商人同士の利益と擁護のために勝手なこととはできないという一つのきびしいモラルがあの時からそこにあったということがわかりますね。

長倉 きびしいと言えどもつとときびしいものがありましたよ。というのは、たとえば、この「せり買い帳」とか「請け」によって商いをしますね。するとその中には、

先もの、つまり輸入品を取引きする場合もたくさんありますよ。それで、その取引した荷物が産地から何かの事故で到着しなかった場合はどうするかと言いますと、それはそのときの時価の相場で取引した先の店から買い請けをもらうのです。つまり、品物を売ったけれどもその品物を渡すことができなくなつたということになると、値合い金とあって、差額の金を払わなければならないことになるのです。

ですからある品物を五百斤買ってもらおう約束をしたのに何かの都合で三百斤しか入荷しなかったとしても、その約束を果たすためには、不足のあとの二百斤をよそからたとえ高くてもそれを買って来て渡さなければ信用にかかわるというきびしいものがあつたわけです。そして、その不足の二百斤がよそから買えなかった場合は、相手が得るであろうところの利益を見計って、その分を金で支払わなければならぬ掟があつたのです。つまり五百斤のところ三百斤しか入荷しなかったから、不足の分はかんべんしてくれなどということは店のこけんにかけても、できなかったのです。相手はもうけるために買ってくれるのだから、そのもうけるだけのマージンは弁償してやらなければならぬという事です。しかもまことに相いすみませんと、相手に金を払った上でさらに大いに恐縮しなければならぬ

いわけですよ。

西岡 ほう、すると、いまのお話の逆で、たとえば、三ヵ月先に品物をうけわたしするつもりで、そのとき百円で取引したとしますね。そして三ヵ月たって品物が来たとき、その相場が下って八十円になっていたとしても、約束は約束で、やはり初めとり引きした値段の百円でうけ渡しするということもあるわけですね。

長倉 それは当然です。引取らぬよう文句でもいったら「こら！ がしんたれ、お前でも男か、よう前向きに歩いとるナアと、ほろ糞にいわれた上で実行されます。しかし、いくら道修町でも事情によっては、中には、そういった場合、やはり人間の世界ですから、約束は約束だが泣きを入れて、何とか話をつける場合もあります。

あるいはまた不徳義な奴もあって値が上ると約束を破ってよそへそつと売ったり、それを承知で売らせたりした奴もありました。だからうまいことやっていたのが大きくのびたり、律義にやっている者がつぶれたり、あるいはまた、もうけてアブクゼをなまじっかつかんだばっかりに失敗したりで、道修町の盛衰というのはそこにあるんじゃないでしょうか。

しかし、道義にはずれたようなことをする者は明治の末年から大正初期にかけてはなかったですね。取引がルーズ

になったのはそれからのちの第一次大戦後のことですよ。成金が出来たり、それが歩に帰ったりした頃の……。

それから話かわって、当時の道修町の店員さんたちの服装についてですが、主人も店員もみな縞の着物に角帯びでした。たとえ主人であつても大島の着物をぞろりと着るといふようなことはありませんでした。前掛けに角帯をギユツとしてきりつとしたものでした。そして丁稚小僧は厚子あつしに前掛けでした。夏はステテコ、バツチで半袖のシャツですが、いわゆる道修町のユニホームといったようなものがあつたのです。それで、洋服を着るようになって、一番早く着始めたのは藤沢さんの連中でした。あれは藤沢商店さんが、堺筋東へ入った南側二軒目から今の八百屋町の角へうつった翌年ぐらいのことですから、大正二年のことだったと思います。洋服と言っても黒のサージの詰めえりでした。

○ それから当時仲国とか仲善組とか言つて出入仲仕の組があつたのですが、そういう連中は、先ほども話しましたように肩引車や馬車で荷運びをしていましたが、それぞれ出入先の店のマークの入ったハッピを着て仕事をしていました。

気賀 ハッピなんていうものは今はほとんど見られませんが、

が、私が学校を出て東京日本橋の春陽堂書店に入ったのは昭和六年でしたが、そのころ店員たちはやはりまだタテ縞の着物に角帯、紺のハッピでした。学校出の私たちはこれを着る勇氣はありませんでしたが、今で言う編集長に当る大番頭さんでもそういう店の仕着せを着ていました。あの頃はまだ出版屋に限らず老舗の店員というのはみなお仕着せを着ていましたね。同じ町内の津村順天堂さんの人たちもみんな縞の着物にハッピで、春陽堂の小僧さんたちとピンプンの試合をやったりしていました。そのころ木村雄四郎先生が津村の研究所長でしたから、そういう風景を木村先生も知っておられるはずです。しかし、縞の着物に紺のハッピというのはなかなかいきなものでしたよ。「兄貴や、二階で木遣りのけいこ……」(江戸端唄、木遣り崩し)といったムードでしてね……。

長倉 そうです、いきなものですよ。正月には親方は羽二重のハッピを着たものですが、ある年、仲仕の親方が羽二重のハッピを居て正月礼に行ったら、大旦那から「仲仕が軽い羽二重のハッピを着るのは、荷物をいたためぬようにか、それとも肩の荷を軽くするのんかいなあ」と皮肉を言われたという話がありました。

高橋 そのころは私の家でも親爺は店員に高橋薬局と染めぬいたハッピを着せていましたが、私はなにか呉服屋の丁

稚みたいでおかしいから着るなど言つたのを覚えています。そのころは夏など道修町へ行くと、新しい店を構えていた武田ですら、さつきお話の道修町ユニホームをみんな着ていましたね。そのころは武田の大番頭の伊藤純一郎さんでさえソロバンを縦に持って、「どや、もうかりまつか」なんて言つてやっておられましたからね。

気賀 あの伊藤さんがですか……。

高橋 そうですよ、ああいう人でも商売の上では一応そういうことをやっていたんですよ。

長倉 当時武田の外国部の部長をしておられた方で大賀寿吉さんという方がおられました。この方は外国語が達者で、ダンテの研究で有名で、ちよつと道修町離れた立派な学者でしたが、その大賀さんでさえ、角帯、前掛け姿で武田のあの低い二階の室に座っておられたのです。

それから今の吉富製薬の社長、竹田義三さんが当時武田におられました。武田とはご親戚の仲ですが、この方が道修町では大学出の番頭さんのはじめだと思えます。

それから当時の道修町の業体ですが、洋薬屋、漢薬屋、和薬屋、粉末屋、端薬屋があつて、工業薬品の方は、日露戦争の影響で、日本でようやく興りかけたといった頃で、天神橋の南詰めに精密会社というのがあつて、その会社はカセイソーダや硫酸を作つたり、チリ硝石を輸入して硝酸

を作ったりしていました。しき野の辺にあった日本酢酸会社では酢酸石灰を輸入して酢酸を作ったりしていたのです。工業薬品の方もそういったごく初歩の時代でした。

高橋 いったい長倉さんが武田におられたところは武田製薬所として何をこしらえていたのですか。ビスミットですか、それともデルマトールですか。これはちよっと漢薬のはなしから離れますけど……。

長倉 アスピリンです。ビスミットやデルマトールは中津の内林工場の仕事です。当時はこのアスピリンとサルチル酸をどうしても日本で作らなければならぬということ、それについてはいろいろと面白いはなしがあるので。漢薬の座談会としては脱線ですけど……。

気賀 どうぞ、どうぞ。

長倉 というのは、あれは大正四年でしたか、スペインかぜが流行しましたね。あるときアスピリンの値段は当時一円十五、六銭だったのが、一躍三十七、八円にまで暴騰したのです。それで武田の店で欲しいものはアスピリンとへプリンですが、ニトロペンゾールとアニリンは私の入った頃、既に滝川さんがやっていられました。

高橋 その頃武田では、滝川末一さんと小林啓八さんという方がやっておられたですね。

長倉 小林啓八さんはズツとあとでしょう。今の武田薬品

にしたら樹脂のようになってしまいました。

第一次大戦前の製薬はコルベンか、大きなものは壺と蒸発皿位の装置で出来る程度のもので、アスピリンの化合釜は京都に高山耕山という陶磁器屋があつてそこへ注文してつくってもらいました。出来たら煎じ薬の土瓶を火に馴らすようにわら火でたきます。馴れたと思つて炭火で大きくと大変で、ピツと割れました。ホーロー引きも当時は洗面器とやかんぐらいで、直径二尺のかまにかけるブラシは日本のホーロー工場にはどこにもないのでやつと日本エナメル会社の厚意と研究欲でつくつて貰つたのが、釜と蓋とのフレンチがホーローをかける熱でひずみが出来て合いません。仕方がないからアスピストのパッキングを入れてそつとポットで締めていくとこれはピンとエナメルがとぶ、そこへ珪酸ソーダとアスピストの粉末をねり合せて膏薬張りをして間に合わすというふうなことです。

ガス溶接も呉の海軍工廠で試作中の時代です。大正六年の秋になって初めて白銅板の溶接を武田の時実杖一さんがやつてくれて、酢酸を使う装置がまずまず成功したわけですね。

昔話をするといつも聞き手から笑われますが、化学工業も製薬も、それに関連した工業が、一緒に進んでこそ互いに進歩するものです。武田二郎先生は化学装置の硝子細工

の創立以来の功労者はもちろん三宅博士です。しかし、創業時代の数年間の事は三宅さんの外に滝川さんを一枚加えねばなりません。

私が研究室で武田二郎先生からやらせていただいた初の仕事は、フェナセチンの第一工程のニトロフェノールです。いかにしてパラのアウスボイテを増すべきかです。しかし染料の原料となつても、医薬品としてはオルトの利用法がない当時は経済的に成り立ちませんでした。

サリチル酸は三宅薫さんの指導で三宅章三さんがやつておられ、無水酢酸は滝川さんの指導で井上政次郎さんがやり、私は米国から来た粉末に近い結晶のサリチル酸を使って、無水酢酸と化合させてアスピリンをつくる仕事でした。今なればなんでもないこんな仕事も当時は大変でした。

無水酢酸は、滝川さんのお考えで、無水酢酸ソーダに二硫化炭素を触媒として、クロールを通じてつくるのですが、何分今と異なつて化学機械工業は零に近い当時の事ですから、製品の規格が一定しません。その上アスピリンに硫黄臭が残るのが悩みでした。

化合にしても、コルベンで油浴上で、ガッターマンに書いてある通りにすれば出来ましたが、工業的に攪拌器をつけてやると反応熱で急速に反応が進行して成書にある通り

が、まことにお上手でした。後で聞いた話ですが、二郎先生は東大にいられる頃、硝子工場の職人に直接習つて、自分で工夫されたそうです。

サリチル酸やアンチピリンなど、高圧や減圧を要する装置にはもつともつと三宅博士は苦心された事と思えます。

合成だけではありません、精製して結晶形をつくることも難しいものです。第一次大戦直後には、酒造家に防腐剤のサリチル酸がありませんでした。田辺はハイデン、武田はバイエルのサリチル酸を輸入して売っていましたが、これかかないと酒が造れないのです。それこそ天下の一大事です。

早くつくらねばというので、もつたない話ですが、その時はアスピリンを加水分解してサリチル酸を遊離させたのです。ところが、遊離させて再結晶しただけでは針状結晶で、かさが低いのです。効力はともかくとして結晶形が商品価値に大きな関係があるのです。店の方では、独乙の輸入品と同じものを要求されるし、三宅章三さんはかなり頭を悩ましていました。

高橋 そのサリチル酸の結晶の話ではおもしろい話があるのです。それは小林啓八さんがハイデン社のものはどうしてあんな美しい結晶ができるのだろう、と思つていたら、

ある日、反応槽の中に薬屑が入っていて、その薬屑を中心に針状結晶が出ているのを見たそうです。そしてその結晶がハイデンの結晶とそっくりだったというのです。そこでこれはしめたと武田二郎さんと話し合っただけです。ここから、それを中心に結晶が固まって出て来たそうです。

ところが、どうしても極めてわずかですが赤いフェノール性の色がとれないので、窮余の一策として、メチレンブルーを薄く溶いて青味を加えて入れたら、こんどは真白い結晶になったそうです。それで、それを灘の酒倉に売りに行ったら、灘の醸造業者たちが、これこそハイデンの結晶だと言ってくれたので、面目を施したという笑い話を聞いたことがあります。(笑声)

まあ脱線はこんなところにして、本論に入りましょう。

長倉 そんなわけで、道修町の工業薬品といっても当時はじつに原始的なものでした。

それから当時、練り絹を洗ってツヤを出させる石鹼、つまりモノポリ石鹼というのを上村長兵衛さんがやっていました。

高橋 マルセル石鹼ですか。

長倉 それとはちよつとちがうんです。

高橋 京都の呉服の練りもの屋はみなマルセル石鹼を使っていたようですけどねえ。

長倉 それよりはもつと上等のやつでした。それからそういう工業薬品のほかに道修町には医療機械屋と繻帯屋がありました。それで、道修町でちよつと風変りの店というのは増田の順血湯でした。これは古い家柄で、それと、次亜

燐の小西久兵衛さんです。ところが私の知るころのジアリンはもはや斜陽のクスリであって、ブルトーンゼがそれにかわる頃でした。それ以前からあったバイエルのソマトーゼは売れた期間が長かったですね。そのほか道修町で変わった店は、青木月斗さんの家の天眼水です。

気賀 俳句の青木月斗ですか。

長倉 そうですよ。あれは家伝の薬屋ですよ。岸田吟香さんの家もクスリやで、堺筋の平野町にあったのですよ。

気賀 岸田吟香の家もクスリやさんですか。文学畑では与謝野晶子が菓子の駿河屋のお嬢さんだということは聞いていましたか……。

長倉 それから今はなくて、当時大きな店としてあったのは膏薬の蛤貝屋です。

それから、こんどは道修町の店の階級のはなしですが、武田、田辺が漢薬屋をやめて洋薬屋になったのはいつからかはつきりは知りませんが、おそらく明治二十年前後だったと思います。薬品営業並薬品取扱規則という当時の薬事法が施行されたのは明治二十三年でしたでしょう。ですか

した。

それから「せり」というのがありました。この階級はブローカーの住吉組に入れなかった人達の事です。

住吉組というのは、さきに申しましたように、主家に長くつとめた人が主家の保証を受けてかなり多額の入会金を出して加入する仲買人の堂々たる組合です。昔は仲買人が長崎や四国、北陸など遠い所へ出かけるので、海路安全を祈って住吉さんへ参詣したのです。今でも毎月一日とか初辰の日に参りますが、そんなことから住吉組といったのだそうです。

しかし、主人が大仲間の組合員でない人(これを「外(がい)」の人といっていました)であったり、主家の承諾のない人、承諾され得る人でも薬局や医者廻りを希望する人は、自転車で注文聞きにまわります。これが「せり」です。

以上は洋薬屋さんの話ですが、和漢薬屋さんの方では問屋として大きいのはなんといっても、菅井豊蔵さんと三国仁兵衛さんのお店でした。それから日野作兵衛さん、つまり今の日野薬品とその分家の日野九郎兵衛さんのお店でした。

それから和薬屋さんでは、道修町一丁目に今仲仙太郎商店、和東源次郎商店があつて、これらは主として貿易を

らその前までは漢薬屋をやっていたわけです。しかし、私が武田へ入った頃は、武田とか田辺は地方の間屋や大きな薬店への卸しもやっていました。道修町の大きなクスリやとしてはなんと言つても、武田、田辺、塩野で、この三つがいわゆる御三家、それからもう一つ香料の塩野吉兵衛さんを加えてこの四軒が大間屋でした。そして、旧い家は大江吉兵衛さんとか小野市兵衛さんの店でした。

しかし、小野市兵衛さんは商売の上では地方卸しと店売りをやっていて、弟の小野由次郎さんというのが、小野市商店アルカリ部として小野市兵衛商店の向いでやっておられました。そして、武田、田辺と合同で小野市が入ってトラストを組んで曹達灰をやられたのです。

この曹達灰というのはガラス工業の盛んになって来た時分でしたから、大きな工業薬品だったので。以上それらの大きな商店の下に店売屋というのがあったのです。それは武田、田辺の大間屋から買ったものを小分けして売る店だったのです。つまり問屋から買ったものを自分のところで、衛生試験所や大日本製薬へ持って行って局方の封印紙を貼ってもらって四五〇瓦(g)とか二五瓦に小分けして売る店です。

一方の階級に注文屋というのがありました。これは地方へ売るのが本筋で、洋薬も和漢薬も工業薬品も扱っていま

やっておられました。それから和薬嘉兵衛さんというのが長堀橋筋一丁目であって、これは旧い家柄で大きな家でしたが、大正六年ころにはもう商売をやめてしまいました。そのほか和薬専門の大きな店は服部勘一郎さん、その別家、島道勘之助さん、この方も俳人で有名だった島道素石さんです。それからこれは京都の人ですが小西嘉兵衛さんと小西重三郎さん、それから河村伊之助さん、岡本佐七さんで、これらはいずれも旧家の和漢薬専門の間屋さんでした。

ただ私にわからんのは、いま申しました服部さんと島道さんの関係ですが、これは別家の島道さんが和薬屋をやったって、なんで本家の服部さんが端薬屋をやったってか、その間の事情を知りたいと思います、それには島道の番頭の上野の秋さんに聞いたらわかるやろうと思つたのですが、あれは中風で倒れとって、ボケとるから聞いてもアカンと言われたので、よう聞き出せませんでした。

そのほか漢薬の小分屋としては池田徳次郎、太田安吉、祐盛作兵衛、阿部三五郎などという店があり、甘草専門では高橋席（虎）吉、中西清兵衛、小寺喜助。人参専門では、南野さんと西村久さん、それから、麝香、牛黄専門では森政七さん、粉末薬品ではキリン商会の綿谷増吉さん、大日之出商会の西野さんや東谷与兵衛さん、吉田藤吉、河

修町の和漢薬問屋さんにひきかえ、富山のクスリ売りというのはいずれも古くからやっていて、私も子供の時分のなつかしい一つの風物詩だったので、あれはしかし、いまだに一向衰えず、富山の広貫堂の従業員は数千と称して、全国に隠然たる販売網を広げてなおさかんにやっているようですが、あれは大したものですねえ。あれも時代の変遷とともに売るクスリの内容は変わっているんでしょうけど……。

長倉 ところでつぎは、道修町の商売の仕切り勘定のはなしですが、当時、道修町の取引勘定は毎月払いでなしに、偶数月の月末だけが節季だったのです。ですから、取引の清算は年六回というわけです。そして道修町の休日というのは節季の翌日、つまり奇数月の一日でした。そして、勘定は、節季の日の二日ないし三日前に、買った方から売った方へ、もし請求金額がまちがっていたら、これこれが間違っていますと、その欄に△ウロコ印を赤でつけて、せり買い帳を持って行き、先方の判取り帳と照らし合わせるのです。そして、節季の前日に、買った方から、売った方へ小切手を持って支払いに行くのです。

気賀 今と反対ですね。掛け取りに行くのではなくて、掛け取られに行くんですね。

長倉 買った方から売った方へ支払いに行かなければなら

村友次郎さんたちでした。

道修町の和漢薬屋さんのおもなところは大体以上のおりですが、そのほかまだ二十軒ぐらいいはあったでしょう。

しかし時代の移りかわりとともにこれらの和漢薬問屋は次第に衰微して行き、和漢薬屋から洋薬の店先屋に転向したり、廃業してしまったりで、問屋は注文屋と共にいつしか消えて行ったのですが、戦時中の統制ですつかり様子がかわったのです。

消えて行った商売といえば、道修町の漢薬問屋ばかりでなく、私の今の店の日本橋筋にキセルのラオ竹屋の間屋が方々にたくさんありましたが、これもいつの間にかみんな姿を消してしまいました。

気賀 キセルでタバコを吸う人が少なくなったため商売繁昌していたラオ竹屋さんが姿を消し、漢方が衰微したので、和漢薬屋さんが減って行ったなど、このあたりが、まさに道修町哀史と言うんでしょうね。

長倉 それでいまあげました多くの和漢薬問屋さんのうち、明治の末期から現在残っているのは、日野薬品、河村伊さん位でじつに寥々たるものです。外は、番頭さんに代がわりしています。

気賀 なんの商売でも移りかわる時代を克服して長くつづけて行くということは並々ならぬことでしょうけれど、道

んのですが、それを怠るともう翌日から売ってもらえなくなるのです。つまり商売ができなくなるのです。ただし支払うその小切手は、その日に銀行渡りになるのではなくて、翌月の三日とか四日になるのです。そして当時の道修町の横線小切手の指定銀行というのは、三十四銀行、帝国商業銀行、川上銀行の三つでした。

西岡 聞いたことのない銀行ばかりですねえ。

長倉 この銀行指定の横線小切手は、商売の大阪でも道修町独特のもので、外では絶対ありませんでした。そして銀行で小切手を当座から落す交換日のことをジャンジャン日と言ったのです。

気賀 それはまたどういう意味ですか。

高橋 足もとに火がつくということかな？

長倉 なにしる小切手交換の日をそう言ったんですよ。

気賀 ジャンジャン忙しいからですか。

長倉 まあ、そりゃ忙しいですよ。地方の出張員はそれぞれ出張先から店宛に電報カワセで送金しなければなりませんし、また店では金が集まらなかった場合は、得意先から借金してでもジャンジャン日には支払いを済ませなければならなかったのです。だからジャンジャン日の払いは絶対的のものだったんです。

気賀 ジャンジャン日なんていう言葉は今使われないで

しょうけど、節季という言葉も今は聞かなくなりましたね。むかしはなんでも盆暮れの節季勘定で、年貢も、医者も勘定も節季払いで、セツキ、セツキと言ったものですがね。

長倉 ただしその盆暮れの節季と道修町で言う節季はちがうんですね。道修町のは偶数月の月末ということですから。

それで、道修町では支払いのその節季が済むと、その翌日の一日は休みですが、別家（べっか、べっけ）の人は母家へお礼に行くしきたりで、そのときの挨拶は、「節中にはいろいろお世話になりました。どうぞ引きつづきよろしくお願いいたします」というのです。それから、晩には別家の嫁さんは草履ぞうりをはいて母家へ礼に行くのです。

高橋 母家というのは威張っていたんですねえ。

西岡 そのかわり、本家は別家が傾き始めたとか、何かことがあると、よくそれを助けたわけですね。浪花節的な麗しさで。

長倉 そうです。こういうきびしいしきたりは封建制度の遺物やといえばそれまでですが、しかし、その中に厚い義理と人情と商売人としての道義があったんですねえ。

気賀 嫁さんが晩に草履をはいて行くというのはどういうことなんですか。ゲタでもよさそうですが……。

次に、道修町のクスリや仲間に使われた符帳についてですが、どういうわけか符帳は田辺の符帳をみんな使っていたのです。武田の符帳でなしにね。

それで田辺の符帳というのは、「シヨハイオワスレナタ」です。つまり「商売を忘れな 田」ですよ。これが洋薬屋も漢薬屋も使った符帳でした。

気賀 そのカタカナをいろいろに組み合わせるわけですか。

長倉 そうです。たとえば「一円二十三銭」というときは「シヨハ」とやるんです。

そして、当時武田の符帳は「ワカエビスマニヨルタ」というんです。

西岡 なんの意味です。それは。

長倉 「ワカエビス」というのは福の神でしよう、「マ」は間でへヤの意味、つまり、「福の神が間（へヤ）に集る」というんだと私は思います。

それから給料のはなしですが、丁稚デッチのことを「ぼんざん」といって二カ月に一回給料をもらうのです。私が小僧に行きましたところは二カ月で五十銭もらいました。休みはさきほど申しましたように節季の翌日と、正月三日間と紀元節と天長節とです。

高橋 少ないですねえ。

長倉 それがそのなんです……嫁の分際で高いゲタをはくなんてことは失礼だ、まだゲタははけんという意味でしょう。

西岡 なるほど、高いゲタは相手に失礼だから、遠慮して低い草履をはいて行くというわけですか。

気賀 いや、これはこれは、そこまで気を使うんではやせませぬえ。

長倉 本家へ行くとき決して表付きのゲタなんかはけないうですよ。麻裏の草履ですよ。

西岡 それはおもしろい話ですねえ。

高橋 漢方の話よりこの方が面白いねえ。（笑声）

長倉 こんなはなしもしておかないと、実際のその当時の情況が浮かんで来ないですわ。

気賀 このあと本論に入っているいろいろな話が出てくるわけですが、つまり、新しいものが古いものにとつてかわるといふ、現在の薬局の在り方に対する批判など、いずれ西岡先生から出ると思うんですが、それへつながるにはやはり長倉さんのこういう旧い話をよく知っておきませんとね……。まあこの機会にひとつ徹底的にくわしい道修町のむかし話を承りたいと思います。これはのちの貴重な史実となりますよ。

長倉 それではもう少しお話ししましょう。

気賀 お盆休みはないんですか。

長倉 お盆は、早じまいといって午後は休みです。

道修町では、そのほかに休みというのは神農さまの祭りの日、それと氏神さまの祭り、天神さまの祭りの日とあつたわけです。それから中之島に太閤さんの祭りがあつたが、これは半日休むだけでした。

気賀 大阪の神農さまの祭りには張子の虎が出てくるようですよ。

高橋 あれはまじないのような魔除けですわ。コレラがはやつたことから出たことですね。

長倉 それから当時道修町の組合長になられた方はどういう人たちかと申しますと、武田、田辺、塩野さんのほかに三國さん、菅井さんで、のちに藤沢友吉さんも組合長になられたことがあります。

気賀 塩野義さんと言わないで塩野さんと言っていたのですか。

長倉 それは塩野義兵衛さんと塩野吉兵衛さんと両方あったから、塩野義兵衛さんの方を塩義と言ひ、吉兵衛さんの方を塩吉さんと言っていたのです。それで塩野と言えばだいたい塩野義のことを言っていたのです。

気賀 しかし、今は塩野義さん一つでしょう。

高橋 いや、今は塩野義製薬と塩野香料と二つあるので

す。そして塩野香料の方は富樫さんという方がやっておられますが、もともとはいまお話のように塩野吉兵衛さんがやっておられたのでして、それをうけついでなのです。それで塩野義には分家があるのですが、本家の方は製薬会社をやり分家の方は香料関係というように業種を分けたのですから、両方いありますが両方とも親戚うちです。ですから、塩野義というのは前の社長塩野義三郎さんの義をとってつけたのでしょう。

長倉 こういう老舗は武田長兵衛さんとか田辺五兵衛さんのように何代も襲名していますからね。小野市兵衛さんの小野薬品にしてもそうですしね。

高橋 小野市兵衛さんといってもいまの社長は小野雄三という方ですが、屋号は小野市兵衛ですね。この小野市兵衛というのはなかなかの名門で、ある時期にはむしろ武田より大きかったこともあるんですよ。

長倉 明治の末期から大正初期にかけては、田辺さんがいちばん金持だったそうですね。しかし不動産を多く持っていたという点での金持は塩野吉兵衛さんや小野市兵衛さんだったかも知れませんよ。

しかし、道修町の葉問屋でほんとうにいちばん旧い家といえは、小西屋の総本家ですね。この小西屋の総本家というのは、大阪の瓦町三丁目白井清兵衛さんという顔料屋

があったのですが、それが小西屋の総本家だということを知りましたが……。

高橋 大阪城を築いた太閤秀吉が朝鮮征伐に行った例の小西行長の子孫が薬屋になって、それが小西の総本家だということですが……。

長倉 小野市兵衛さんもその当時からクスリやさんだと聞いています。

気賀 いずれにしても、そのあたりはみな名門ですね。小西、小野、武田、田辺、塩野義などはずっと今につづいているわけですね。

高橋 これは余談になりますが、面白い話があるんです。それは、私の友人で岡本明保君というのがいるんですが、その男が田辺の労働組合が結成されて組合長になったとき、いろいろと交渉をしなければならぬ関係上、当時の田辺五兵衛社長に会ったそうです。そのとき田辺社長が言うのに、岡本君、きみはいま新しがってそんな無茶なこと言うけど、道修町には古いしきたりがあって、そのしきたりはちよつとやそつとで出来たものではなく、やはり必要があつて出来たものだ。そのしきたりも悪いところもあるかもしれないが、いいところもあるんですよ、だからそういうことも加味して、組合の労働運動をやってくれんと困るんやと言われたそうです。

そこで岡本君が、社長は古い古いと言われるけど、どれほど古いのですかと聞いたら、社長は、わしとこかいな、わしとこは江戸時代から続いているんやから、今から言うたら百七〇八十年やろうなと答えたそうです。すると岡本君が、たつた百七〇八十年ですか、私のところは、もつと古いですぜ、わたしとこは、上賀茂神社の杜家(旧家)で

神武東征以来八咫鳥の族以来の家柄やと言ったら、田辺五兵衛さんもこれには一本参つて黙つてしまわれたという話があるんです。(笑声)

気賀 その話で思い出しましたが、ある人が近衛さんにお宅はお古いお家柄ですから、古い道具をたくさんお持ちでしょうねと言ったら、近衛さんが、いや戦争で焼いちゃったから大したものはないですよと言われたので、いつの戦争ですかと聞いたら、応仁の乱のときですよ、と答えられたそうです。(笑声)

長倉 それから次に、当時扱ったクスリのはなしですが、いまは生薬屋さんはいっているの生薬は扱っていませんが、麦角、セネガ、ウワウルシ、吐根、キナ皮、サフランなどは漢薬屋でなしに洋薬屋の方で扱ってました。しかしジキタリスだけは別問題でした。これは保存がむずかしいので、小分けは二ノ宮商会が扱ってました。それから同じ局方品でも、シナ花とセンナ葉は漢薬で扱ってました。

それで和漢薬の販売ルートというのは、今も昔も大した変りはありませんが、集荷人というのは現在は一人もいなくなつてしまいました。たとえば綿茵陳とか、葶藶子などとして来てくれと言つても、それをとつて来てくれる人がいなくなつたのです。

それから今と昔とで全く変わったことは、昔はきざみのものはなくて、ほとんど生薬で取引されていたことです。それで、きざみのもので取引したのは、黄連と半夏、これは刻むのが難しいからです。木通、ニワトコ、これは安くて刻む手間にあわんからです。それら以外は生薬で扱われていました。

それで、漢薬は袋込み、一斤(六百グラム)で扱われていましたが、当帰、芍薬、肉桂、唐牛膝といったような長い形のものには二斤入れでした。それから、当時はクスリを元俵で買うときは、和薬の場合は「四の入れ」ということばがあつたのです。それは百斤買つたら、九十六斤分の代金を払えばよかつたのです。つまり四斤分は目減りとみただけからでしょう。しかしたとえ和薬でも、ヒゲ人参とか黄連、木附子などはそういう「入れ」ということはなかったのです。ところがこの四の入れのあるものと、無いものとの区別というのは、これは私にもいまよくわかりません。しかし、当帰、川芎、芍薬、木瓜、独活、防風などは「入

れ」があったことはたしかです。そして、この「入れ」ということがなくなつたのは大正七〜八年ころだったと思います。これは地方の出荷主の希望で組合の申合せで廃止されました。四の入れに似たものに和紙屋には「九六だて」があつて紺紙のような染紙は一束九百六十枚です、染める加工に四%のロスを見込んだのでしようね。それからふつうクスリは一斤百六十匁でしたが、木附子だけは百三十匁が一斤でした。松ヤニ、明礬は二百三十匁が一斤でした。これを唐目とらめの一斤と言つたものです。

西岡 目方のちがうのはなぜですかねえ。

長倉 それがわたしにもよくわからんですが、木附子は輸入五倍子がポンド立ての百二十匁ですからそれに近い数字でしょう。唐目は当時砂糖にも使っていました。地方の薬屋が大阪へ来た時の和漢薬の取引は殆んど品物の見本を見せて買ってもらうのです。これはいいことだったですね。いまのようにきざみばかり売るのはそれができませんが、当時は品物を一つ一つ見て、たとえば、茯苓一つにしても、これは東ものだとか、西ものだとか言つたものです。注文屋の番頭は小分屋から借りて来たりして、袋に入れた見本を客に見せるのです。

ところが、その見本の袋でも物によっては「上わ置き」というのがあつたのです。上わ置きというのは上にだけよ

い品物を入れてあるやつです。

西岡 羊頭狗肉ですね。

長倉 当帰、芍薬、遠志などはよく上わ置きがありました。それから私もえらそうな顔をして小分屋へクスリを買いに行つても、はじめの頃は笑われることがよくあるのです。それはたとえば、貝母など買いに行つて、品物を撰らせてくれなど言つて大きなのをえらんで買つたりすると笑われるのです。あれは大きなやつはアキまへんからね。

高橋 その貝母の大きなやつはだめだというのは、中にアニコが詰まっていますそれがくさっているんですね。黄芩も大きなやつは中にアニコが入っていてくさっているやつがあり、これはあまりよくありません。

長倉 だからそんなのを買つてくると、「ド阿呆！」といつて番頭にどやされたものですよ。それでいま話しましたように大きなのは「アニコ」、それから浜防風などで中に簧の入っているやつは「ポカデ」と言つたのです。川芎などもギユツとしまつていけないのはポカデと言いました。そんなものを買つて来て刻むとロスがうんとふえて目減りも多いが、ききめも悪いですよ。

それから、地方の産地からも生薬が沢山送られて来ましたが、私どもはそれらの荷物をひと目見ただけでこれはど砂が入っているぐらいは当りまえで構わないのだといううなことから、産地の方でわざわざ海の砂をまぜたり、目をふやすために水をかけたりして送つて来るという傾向もあつたですね。

長倉 たしかにそういうことはありました。しかし、そういう不正をやり始めたのは大正十年ころからのことで、それ以前のころはそういうことはありませんでしたね。それは世の中のガラがわるくなつたということなんです。つまり先祖伝来のあきないを律氣にまもつて信用第一でやつて来たのに、世の中がガラがわるくなって来て、こんどはもうけ主義になつて来たので、そういう不正をやる者が出てきたのですね。

気賀 商道地におち始めたのは大正十年ころを境とするということですか……。(笑声)

長倉 まあ、そういうことですが、つぎに当時どんなクスリがよく売れたかと申しますと、明治の末期から大正にかけて、売薬の面から申しますと、第一に仁丹、そのつぎが中将湯と言われたものです。生薬でも私どもの方は当帰、川芎、芍薬などの婦人薬原料がよく売れました。

それから香附子、白朮、茯苓もよく売りました。サルバルサンの六〇六号が出たのが明治四十五年だったと思いますが、そのころは梅毒のクスリがよく売れました。また肺

こから送つて来たかということが荷造りの仕方などですぐわかるのでした。たとえば同じ茯苓の荷物でも千葉県あたりから来るいわゆる東ものの茯苓は米俵につめて送つてくるからすぐわかるのです。ものによってはカマスに入れて送つて来たりで、いろいろな荷造りの特徴がありますから、送り主のフダを見なくても大体わかります。漢薬では品のいいものとわるいものでは包装がちがうのです。ハコに入ってくるもの、かごに入ってくるもの、ドンゴロス(麻袋)に入ってくるものなどで、品物の等級がすぐわかりました。

それから輸入の荷物を仕分けするためあけると、さきほど申しましたように上わ置きがあつて、よい品が上にだけあつて、下の方はわるい品、またときには目方を出すために大きな石が出て来たりすることもよくありました。しかし中国も中共になつてからはそういう不正がなくなつたということ、これはありがたいですね。それに今の中共から来るものは一級品とか五級品とか、ちゃんと品物の等級を分けてそのとおりよこしますから、これはいいですね。大黄など一級品、二級品、三級品と仕分けて来ますからね。むかしは輸入品もそうですが和薬の方は上わ置きがとくにひどかったです。

高橋 上わ置きの話といえば、海人草ですが、あれは少々

病のクスリもよく売れました。ツベルクリンもその頃ですが、あの注射薬一本が当時六円でした。ところがそのツベルクリンは問屋さんに五十本を注文しても、せいぜい十本ぐらいしかわけてくれなかったのです。そして、問屋さんに頼みに頼んでやつとわけてもらったものを得意先のあつちへ二本、こつちへ三本といったようにして売ったものです。ですから、それにつれて、解毒剤の山帰来、忍冬、木通、蘭方のサルサ根などはよく売れました。また神経痛、リウマチのクスリも売れて、後世方の独活、防風などの系統のものがよく出ました。それから、いまは売れなくて、当時まだ売れたものは軽粉、天然の志摩真珠などで、真珠は黄痘などに使ったようでした。それから、大風子油も今は売れませんが当時はよく売れました。岡村の大風子油と言つてね。

気賀 レプラに使つたんでしよう。歌人の明石海人とか小説家の北条民雄の作品に大風子油がさかんに出て来ますね。「きょうもまた わがししむらに 大楓子油を打つ…」といったようなうたがありましたよ。

長倉 また、乳香、モツヤク、コハクなど出しましたが、今はこんなものはほとんど出ません。それと烏蛇、白蛇も売りました。

また和薬屋と漢薬屋両方とも扱った生薬は山帰来、白

芷、呉茱萸、山茱萸、猪苓、五味子、沢瀉、細辛などです。柴胡は三島柴胡と鎌倉柴胡で、唐の柴胡はありませんでした。柴胡が売れ出して、唐を使うのは昭和時代からです。それから附子は唐附子というのがあって、木の箱に一斤ずつ入っており、乾燥してみがきのかかったものでした。白河附子は漢方医向きで、塩附子は朝鮮人からの注文が多かったです。そして現在の炮附子は大正十二、三年ごろから使われ出したようです。

西岡 するとそれまでの漢方医の使っていた附子は炮附子ではなかったということになりますねえ。

長倉 唐附子を買って、それを修治したということです。そのまま使つたのではないですね。橘皮と陳皮のちがいですが、むかし橘皮と言つて売られていたものは柑子ミカンの皮で、陳皮はふつうのミカンの皮です。

それからこんどは、私ごとの話になりますが、私は大正八年に武田さんのところをやめたのですが、当時欧州大戦のあとで染料に困っていたときでした。それで私は武田さんのところで、アニリンとかニトロベンゾールなどの化学的なことも勉強させてもらっていましたので、当時新しく考えられて来た染料中間物の問題に興味を持ち始めたのです。それで、アニリンに塩酸を入れたら塩化アニリンが簡単に出来るのです。ところが工業用の塩酸を使うと色がつ

く、そこで、白塩酸というものを使えばいいのです。それで塩酸を作るのに、いま考えるところとおかしいことですが、硫酸ツボの中へ塩を入れておいて、上から分液漏斗で塩酸を入れて、出てくる塩酸を一度硫酸洗いしておいて、水の中へ導いて塩化水素の濃厚なやつをやつておけば、塩酸というものはそれでけっこう商売になったものでした。

西岡 だいぶ時代がちがうようですね。

長倉 違いますね、例のステンレスですがあれの対酸試験をやったのは私です。大正四、五年のころのことでした。これの鋳物を注文しましたが実用化されるにはあと十年かかると言われたものでした。しかしその時限においてやつて行くと、アニリンに塩酸を作用させて塩化アニリンの結晶をこしらえたら、それでけっこう商売になったのです。それで、染料中間物は案外ちよつとした工夫でできましたのでそういう工場を私はやりたかつたのです。

それで工場を持つつもりでやつている間に例のパニックで相場の大暴落を果たし、そのため私も商売の方向を変えなければならぬ羽目になったのです。そんなわけで私は漢方の店をやることになったのです。ところが当時はもうすでに漢薬問屋は洋薬にだぶん転向してしまいましたし、漢方専門というのは一軒もなく比較的よく扱う店は、

池田藤と天神橋筋の中道屋の二軒ぐらいのものでした。

しかし、大正九年ころから薬草屋がふえて来たのです。その原因は築田多吉さんの赤本が大いに影響したためです。

つまり、腎臓病にはハブ草とニワトコ、トウモロコシの毛がよいと言い、胃腸病にはハブ草、ゲンノシヨウコといったぐあいにあの赤本で大いに宣伝されたからです。

西岡 ということは、民間薬がやはり始めたということですね。

長倉 それで、漢方の店をもつには漢方をすこし勉強しなければならぬというわけで、幸い私の家内のさとの曾祖父が真島玄龍といって漢方医でしたので、家内の里へ行って土蔵をひっかきまわし、手当り次第漢方の古い本を持って来てよみ始めたわけですね。

それで、傷寒論だとか、南涯（吉益南涯）の気血水説だとか、読んでもなかなか頭に入らんですわ。漢方の素養はないし、薬学校で習っただけの知識ですからね。それで、そのとき手取り早くいちばん役に立ったのは赤木勘三郎さんが作った売薬製造のタネ本でした。あれは全く便利で、太陽の病たる、なんとかというふうなむつかしい傷寒論をよむよりも、売薬的にやるにはあの本の方がわれわれには手っ取り早いのです。

高橋 あれは和漢薬製劑処方全集とかなんとかという本でしたな。

長倉 また奈良の石崎直矢さんが書かれたプリントも便利でしたし、「梅花無尺蔵」なんかも参考になりました。そうしているうち、昭和二年に湯本求真先生の「皇漢医学」第一冊が出たので丸善に注文して買い、さらに和田啓十郎先生の「医界の鉄椎」を求めてよんだり、高麗橋の渡辺熙先生の「東洋医学の烽火」という本が出てそれを読んだりして勉強しました。

ところで民間薬ですが、昭和十二、三年頃は婦人雑誌が薬草々々といっずいぶん宣伝しましたね。松葉とか蘇鉄の葉は主婦の友が宣伝しましたね。

気賀 いまの枸杞みたいなものでね。

長倉 いや、枸杞ならまだいいですよ。あれはのんで通じはつきますからね。ところが、あの松葉や蘇鉄は胃のぐあいの悪くなる人が沢山あるんです。

木村 それからそのころ石楠の葉が出ましたね。ところが、あの石楠は、漢薬の石楠というのはシヤクナゲではなくて、オオカガミモチなのです。日本で間ちがえて当てていたの知らずに、主婦の友が宣伝してしまったので、それで困ったのですよ。

長倉 それでマスコミの宣伝というのは、それがために

ない、炭はない、処方をつくるにも材料がないで、あきらめざるをえなくなつてやめたのが多いのです。

ところが私のところは幸いに、メーカーの立場にありましたので、統制会社で配給を受ける資格があつたため、メーカー割当ての外に三国さんの厚意によりまして、統制会社で引きとり手のない品物をいろいろと、いわゆる抱き合わせで沢山引きとつたのです。丁字とか桂枝だけくれというのではいけません、芋大黄、陳皮、色を染めた黒い黄耆、それから困りものの南方から来た茯苓といったようなものを抱き合わせで柴胡、桔梗、黄芩、丁字などというものをわけてもらったのです。ところがありがたいことにそれらが次第に相場が上つて三万円ほどの配給をストックしていたのです。当時三万円の品物というと、牛車に積んで三台ぐらいあつたのです。それでおき場所がないので、知り合いの寺へあずけて、寺の物置きでそれらを売りながら商売をやっていたのです。

ところが次第に復興するにつれて、センナ葉など一斤十玉円ぐらいだったのが四百五十円ぐらいまで上がったのです。そしてわれわれは、大和とか富山で配給をうけて残りのあるものを分けてもらいにまわつたのです。また甘草や甘草エキスなどは、調味料としても使い、醸造業者がほしがっていたので、ハウスカレの浦上さんあたりへ頼ん

扱つた薬草屋はもうかつたかも知れませんが、漢方発展のためには害にこそなれ利益にはならなかつたですね。

さてそこで、こんどの戦争に入るのですが、戦争がはげしくなつてくると、統制組合ができ、企業合同が行われたわけです。それで売薬製造業者は年三十万円の実績がないと独立した企業体にはなれないということでした。それで大阪では三十いくつかの企業体ができ、薬局は医薬品小売商業組合というのが出来て生薬小売業者もこれに統合されたのです。そして私もこの組合の理事におされましたが、そのころは道修町のクスリやさんもこの統制会社に合併されてしまつたのです。

そしてクスリはみな配給制になつてしまつたのです。ところが、配給が少なくなるにつれて、困つたことは品物がわるくなつてきたことです。たとえば、黄連に毛が大分についていても統制品だし、砂や土の目方が半分位の吉草根が出てきたり、芍薬は株を切ろうが切るまいが、極く細い根がまじつても、芍薬で通つたし、川芎にしてもだんだんわるくなつて来ました。そのあげく品物は次第になくなつてきて、そこで戦災に遭つたというわけです。

それで終戦後、和漢薬屋がほとんどなくなつたのは戦争中やめさせられたのが多かつたですが、やめさせられなくても、資金的に立ち上る力がなかつたとか、煎じる土瓶はで、桂枝や甘草を分けてもらつたりしたのです。また進駐軍が入つてきたために香辛料の需要が増えて来たので、その方へ香辛料を納めたり、またもう一つ有り難かつたことは海人草を扱つてうまく行つたことでした。虫下しにあればずいぶん貴重で海人草ブームでしたからね。

気賀 海人草はトリアシとはやはり区別していたのですか。

長倉 もちろん区別していましたが、そのころはトリアシだつてどんどん売れて行つたものです。ところが、それがかえつて悪かつたのです。というのは、ものがなくてなんでも売れるので、わるいことするのが出て来たのです。

たとえば、杏仁の中へビワのタネを混ぜたり、半夏の中へ天南星の切つたのを入れると、それが大粒の半夏にみえるのでそれを入れたり、防己の黒いのが黒防己といつてよいとされていたので、防己を長い間雨に打たせて積んでおくとアクが出て来て黒くなるので、それを黒防己と称して高く売つたり、甚しいのは、熟地黄を作ると称して、地黄に墨汁をぶっかけておいて、上からムシロをかぶせておくと地黄が蒸せてやわらかくなるのです。それを熟地黄だと言つて売つたりした人があつたのです。

それからもつとひどいのは、ゲンチアナ根のないころ、茶色のものを何かまぜてゲンチアナ末だと言つたり、セン

ブリの花のついていない坊主と称するものがあって、これだけ坊主のセンブリがあれば、センブリがどれだけできるとか、そういう不正が沢山あったのです。

それというのも、ろくに生薬を知らない、にわか薬草屋が、金もうけ主義でやるという人間が出て来たのでそういうことになったのであって、伝統を誇る道修町出の人だったら、いくら成り下ってもそんなわるいことをする者はいませんよ。

私の道修町の想い出は大体そんなところです。どうもすこし道修町のいい面ばかりをお話しように思いますが、言ってみればこれも想い出の山、想い出の川と言ったところでしょう。

気賀 どうも長時間にわたって伝統ある道修町の今昔を縷々承ることができてまして、まことにありがとうございました。こういうお話はご年配の長倉さんあたりからお聞きする以外にはもうすべがないわけで、その点、道修町の生の資料を後世に残す意味でも大変有益なお話だったと思います。これはまた私も漢方関係の者ばかりでなく、全国の薬業者、一般の方々にも大いに広く聞いていただきたいと思うほどです。

それでは先ほど木村康一先生、坂口弘先生もご出席いただきましたので、つぎに木村先生に生薬学ご研究の回顧と

いったところをお話いただいて、その上、本論に入りました。漢薬に関する諸問題をとりあげ、各論的に逐次みなさんのお話を承ることにいたしたいと思います。

○ **木村** それでは私が生薬の研究に入りました古いころのお話をしましょうか。

私は東大に入りましたのは大正十三年ですが、そのまえの水戸高等学校時代に当時化学の先生で、現在は茨城大学の名誉教授でおられる倉橋治助先生に、君は大学へ入って薬学をやるのなら、朝比奈先生の弟子になれと言われて、その気になったのです。

それで私は高等学校時代から植物が好きで、よく植物採集に行ったりしておりました。そして大学へ入ったら、薬学には朝比奈先生という偉い先生がいらっしやるし、薬学を教えていただいて何か新しいクスリを發明し、保健衛生の上で大いに貢献したいというような理想にもえて薬学科に入ったわけです。

それで生薬学なんていう学問があるということは大学に入ってから初めて知ったようなわけでした。しかし、大学における朝比奈先生のご講義はもちろん生薬学のご講義だけで、漢方のはなしなどされるわけではありませんでした。それで三年になって朝比奈先生の教室に属することに

なりましたとき、私はまだ生薬を研究するのだということ

はわからないときでしたから、朝比奈先生について植物化学をやるつもりで先生の弟子になったのです。

ところが、そのとき朝比奈先生が、植物化学など、みんなと同じことをやってドングリのせいくらべでやることはない、君は植物が好きだから、他のもののやらない生薬学をやったらかと云われたのです。

わたくしの卒業の年に、朝比奈先生のところで助教授をしておられた藤田直市先生がドイツへ留学されることになったのです。藤田先生は学生の実習を持っておられて、その生薬の実習をやる留守番をお引受けしなければならぬ羽目になってしまったのです。それでわたくしとしては三年のときは卒業論文の特別実習をすると共に、学生指導のための準備をやっていたというのが実情でした。

ところが、幸いのことには私は植物の実験的なことが好きだったので、すでに高等学校時代から野原先生の御指導を受けてやっていたのです。さらにさかのほれば、私は小学校時代からすでに大工の使う刃物を磨いりして顕微鏡的研究用プレパラートを切る剃刀を磨ぐことなどを身につけていたことでした。ですから高等学校に入ったとき他の学生はロクにカミソリも磨げなかったですが、私はカミソリをどんどん自分で磨いで実験に使っていました。ですから

その点、大学へ入ってから仕事が楽でした。

そして、三学年の特別実習にはじめは西洋生薬のブックをやって半年位で卒業論文ができたので、藤田先生に柴胡をやってみると言われ、それをやり始めたのです。で、柴胡とかそういう漢薬を研究するようになったら、こんどは、漢方で使う生薬をやるには、それを治療に実際に使っている漢薬のバック・グラウンドというものを知らなければならぬと思っただけです。

その頃金沢医学専門学校出で漢方の先覚湯本求真先生が「皇漢医学」という本を出されたときだったので、早速それを求めて読んだのです。ところが、読んでもなかなかよくわからないので、直接教えていただくと思って、当然訪問したのです。すると湯本先生が出て来られて、君は見たところ大して病気でもなさそうだが、いったいなにに来たんだと言われるのです。それで、私は、漢薬の研究をやっている者だが、先生の本を読んでもわからんから教えていただき度いと思ってやって来たという意味のことを申しあげると、先生大変よろこばれて、それならあがれということであがってお話を承ったのです。それ以来ちよいちよい湯本先生のところへ行くようになったのです。

気賀 それは何年ですか。

木村 大正十五年です。（*「皇漢医学」は昭和2年および3年に出版されたので、どこかに誤りがある。あるいは大正6年刊の「臨床応用漢方医学解説」か。）

気賀 それでは湯本先生の第一号の門人というわけですよ。大塚先生や荒木さん、佐藤省吾さんなんかより早いでしょう。

木村 ところが、その湯本先生のところへ初めて行ったその夏に、植物の中井猛之進先生に伴って小笠原島へ行ったのですが、その船の中で桃を食べた後で胃酸過多を起こしてしまつて、帰つて来たら、ハラが空くと胃が痛い。それで胃散をのんでいたのですが、そのことを朝比奈先生に知られ、薬をのんだって治るものか、灸をすえてこいと言われるのです。それで先生はわざわざ御紹介下さるし、同じ胃の不調の長谷川秀治博士と半信半疑で鍼灸家の沢田健先生の処へ行って灸をすえてもらいましたら、たちまち治つてしまつて、家へ帰つたらケロッとしてしまつたのです。以来沢田先生のところへも度々遊びに行き、鍼灸医師の成り立ち、灸点の探知法など鍼灸について知識をえました。

その間漢方や鍼灸の古典を読んだりして東洋医学というもの概念の頭に入れることができました。それで、漢方で言う三陰三陽と鍼灸で言う三陰三陽とは無関係のもので

……。

木村 いや、それはね、はじめ白井光太郎先生が藤田先生は在独中だし、中尾万三先生にお願いしたところ、中尾先生に断わられたので、私のところへお鉢がまわつて来たと思うのですが、中尾先生は本草綱目は誤りだらけだとお嫌いでしたからね。

わたくしもそのころ忙しかつたので、頭註をひき受けたものの、その資料の整理など何から何まで自分ひとりでは手が廻らないので、文芸春秋社の紹介で婦人文士の城さんに頼んでカードなど整理してもらい、頭註の原稿を作りました。白井先生からいただく原稿料などは、城女史のアルバイト料にまわしていた次第でした。あれは春陽堂から監修者の白井先生に一括して原稿料が渡されて、白井先生からわれわれに分配されたのでしたけど……。

気賀 そういうことは私知りませんでした、あの「国訳本草綱目」の原稿料はいまお話しのように、私が春陽堂の会計から一括してもらつて、それを白井先生にさしあげていたので。すると白井先生はそれを頭註を分担して下さつたみなさんに配当されたわけですが、そのころ牧野富太郎先生はとも生活に困つておられたので、白井先生はご自分の稿料を牧野先生の分の中へ入れて、しかも白井先生はわざわざ石神井のあの牧野先生のお宅まで届けに行つ

はないというような気がして来たのです。そんなことから、やはり鍼灸というものを知らなければ漢方もわからないなと思つたのです。

それでひところは私は友人に灸をすえたりしていました、朝比奈先生にもだいぶすえてあげました。

気賀 そうしますと、木村先生は生薬を研究するためにはそれがクスリとして実際に用いられる漢方を理解しなければならぬ、それにはまた鍼灸も学んでいわゆる東洋医学なる背景を知つておかなければならないということから、湯本先生の門を叩き、沢田先生の門を叩かれたというわけですね。

私が木村先生に初めてお目にかかったのは昭和八年でした。

木村 いやもつと前ですよ、昭和四年ですよ。春陽堂の「国訳本草綱目」のときですから。昭和六年には私は上海自然科学研究所の方へ行つてしまつたですから……。そして昭和十四年に京大の医学部に薬学科ができ、慶松勝左衛門先生、高木誠司先生からその生薬学教室の助教授にするから京都に來いといわれ、上海からその年三月に帰つてきたのです。

気賀 古いはなしなんで、その辺は忘れてしまいました、が、「国訳本草綱目」の頭註を先生におねがいしたのは、ておられたのです。そして、ご自分の分まで牧野先生にさしあげておられたのに、そんなことを言わずに黙つて牧野先生に渡しておられたので、たださえ金のことについては恬淡な牧野先生のことですから牧野先生の方も余計もらつておられることをご存知ないのです。

そのことはずっと後になつて私は知つたのですが、白井、牧野といえは学問の上ではきびしい論争をされても白井先生の牧野先生に対するそうした友情は実に厚かつたですね。

このことはいつか私書いたことがあります、牧野先生の方もいつも「白井、白井」と言つておられました、白井先生が亡くなつて、お葬式の日、牧野先生が涙をポタポタ落しながら墓標を書いておられました、あのシーンはじつに胸が詰まる思いでした。

木村 白井先生がなくなられた時は私は上海にいたので、ご存知のように白井先生は附子をのんでおられたでしょう。それで私は上海へ赴任して行くとき白井先生に、日本の附子は危険ですから注意された方がいいですよとくれぐれも申しあげて行つたのですが、とうとうその附子で亡くなられたという報を上海で知つたとき本当に残念に思いました。しかも白井先生が亡くなられたのは、昭和六年の五月でしょう、私が上海へ行つたのは三月ですから二カ

月後に亡くなられたのですよ。上海へ行くとき、白井先生に附子だけはのむをおやめになった方がいいですよとよく言ったのですが、白井先生は、いや君そういうけどペニスに立つようになったからねえ、と言っておられました。あのときは先生は七十歳でしたけどね。

気賀 考えてみれば、白井先生のおからだは陽実証でしたから、附子をのむなんて危険なことでしたね。

木村 僕と同じで陽実証でしたよ。実は僕も大学のとき、附子ではひどい目にあっているんです。

僕は冬になるとのぼせて冷えるので、陰証で冷えるのと同じ解釈をして、紀伊国屋さんへ行つて附子一個を五十銭だから買って来て〇・二グラムのんだのです。すると手足が温まって来たので、これはいいわいというわけでさらに倍量にしてのんだのです。すると夜中に何か重いものが胸の上に乗っかってくるような気がして目がさめたのです。するとからだは動かないのです。やられたと思つて幸いうちに再び睡り、翌朝目が覚めたときはケロツとして幸いことなきを得ました。附子を実験してみようと思つてのんだのですけど。その点、白井先生は漢方を知らなかったからね。

気賀 ところで木村先生の学位論文は何をおやりでしたか。

木村 石斛でした。あれは昭和十二年でした。

高橋 気賀さんが出された雑誌「本草」の第二号を見ると、白井先生の追悼の記事の中にあなたの若かりし頃の写真が載っていますね。今日持つて来ようと思つて忘れたのですが……。

それで当時のことを補足的に申しますと、慶松勝左衛門さんも中尾万三さんも、うちはともに京都の二条のクスリやさんなのです。そして、慶松勝左衛門先生の先代の慶松勝左衛門さんと中尾万三さんのお父さんの中尾万七さんとは互いに友だちだったのです。それで、慶松が東大へ行ったので、うちの息子も東大へ行くといったような関係でそれぞれ東大へ行ったわけです。

そして慶松さんは政治的経綸を持った人でして、若くして満鉄の中央試験所の所長をされたのですが、そのため中国大陸の薬材としては、何よりも漢薬の研究の重要性を知つていられたわけです。一方後輩の中尾さんの方は絵もうまいし、漢籍が読めるということから中尾さんを抜擢して満鉄の中央試験所へつれて来たのです。

ところが、中尾万三さんは文献は読めるけども、漢薬は知らないのです。そこで、朝比奈教室の木村さんに来てもらおうということになって木村先生が行かれたわけですね。

気賀 そういうことだったのですか。中尾万三先生の話な

ら私は春陽堂におりましたところ、例の「紹興校訂経史証類備急本草」を出版するについてその序文を書いていたのだと思うと、宇治の中尾先生のお宅へうかがつたのです

が、今日書く、明日書くで、とうとう一週間近く先生のお宅に滞在してしまつたことがあります。あの方は本職の薬学よりも、むしろ青磁の研究で有名なぐらいでしたから、お宅には釜もできていてご自分で陶器を焼かれたり、いろいろな話をされて一向に序文を書いて下さらないので、気をもみながら泊り込んでいたのですが、それこれしているうち、やっと最後の一週間目に、よし今日書こうと言われて書き始められたら、ほんの三十分ぐらいで書いてしまわれて、これでどうだと言われるのです。気が向かないとあんなに書けないものかと思いました。しかし、中尾先生は氣むずかしいところはあつたけども、立派な方でしたねえ。

木村 さつきも話したように、私は生薬を研究するには漢方も鍼灸も知らなければならぬというのが私の持論なんです、その点、中尾先生は生薬をやつていながら漢方を知らんのだから、あれは僕には不満だったですね。あの人は偉い人だったが、文献学者であつて、漢薬を研究する人ではないと思つたねえ。しかし上海にいったとき、僕は中尾さんに生薬は単味で滲出したときと、処方にして滲出した

ときとは違うことを考えなければいけないということと言つたことがあるのです。

つまり、葛根湯の中にふくまれている桂皮とか葛根とか、そういう七つの生薬をそれぞれ別々に滲出したものと一緒にした場合と、一つの葛根湯の方剤として一緒に煎じた場合と成分がどうかという実験をやつたのです。葛根湯の処方の中の生薬一つ一つについては、直接解熱作用のあるものはないが、七つちゃんと入れて煎じると、熱が下がるんですね。だから一つ一つの成分でなく、七つ一緒にした場合に限り特別に出てくる成分があるかもしれないということです。

それからもう一つおもしろいことは、葛根湯の中の一つ一つの生薬は、解熱作用はないが、処方として用いた場合は一つ一つの生薬の結果が総合されて解熱作用を呈するのではないかという考え方、つまり、一つ一つの成分を分けると同時に、その薬理をやつて、しかもその薬理をただ総合するのではなくて、薬理の間接的作用、すなわち、一つは肝臓に作用するとか、一つは血管系に作用するとか、あるいは神経に作用する、とかそういうことの総合が熱を下げる作用として働くのではないかという考えのものと僕たちは実験を始めたのです。

いまわたくしは富山大学の和漢薬研究施設で生薬をやつ

ていますが、いまお話したようなことを、やはりこの施設の研究方針としております。

気賀　そこへ行き着いた原因というのは、たんに生薬の研究というだけでなく、クスリとしてそれをを用いる臨床とのつながりに、いつも木村先生は目を向けて来ておられたから、ということですね。

木村　この間日本東洋医学会で沢瀉さんがデカルトとベルグソンの哲学の話を読まれたが、いまの日本の自然科学というのは、これはもう全くデカルト式になってしまっていますね。あくまで人間のからだを試験管の中の物質として扱っていますからね。ベルグソンの行き方ならいいんですけどね。

そして、その上わるいことには明治の初めに、西洋医学で名を為そうとしたわれわれの先輩は偉いけれども、漢方を駆逐しようとしたんですね。つまり二千年来われわれのいのちをあずけて来た漢方のいいところまで捨ててしまったことは大きな誤りですよ。それは、何ごとも当時文明開化崇拜で、遅れていた科学の一定水準にまで達するために、ああいう方法も必要であったかも知れませんが、あまりにデカルト的に過ぎ、しかもその思想は今日の学者の頭の中にも受け継がれ、その上、古いものは何でも未開なものとしてあなどり、却ける考え方が根強く、本当に漢方漢薬

一緒に考えてやって行かなければならないと思うんです。

漢方はいわゆるヨーロッパ式の科学というものがないですからね。だから漢方には新しい薬理的な、また生理学的な解釈に欠けているわけです。それがないと人に納得させるにはなかなかむずかしいですからね。ところが一方臨床家は事実として、西洋医学が見離した患者をちゃんと治している例もあるんですからね。

そこで、いま気賀さんから出たテーマの、薬学者と漢方臨床家とのつながりは今後いかにあるべきかということに對する私の結論は、漢方を科学するためにはその臨床を裏づける理論が必要であるが、その理論は、漢方にはたとえば、陰陽、虚実といったような独自の理論があるのだから、その根底に立って臨床家は実際のデータを示していただきたい。そして薬学者のわれわれは、その臨床的な結果を薬学の立場から追試し、同時に現在の病理学あるいは生理学の面からも解説し、裏づけして行って、新しい治療に使えるようにしていきたいと思うのです。つまり薬学者といえども臨床家とたえず緊密な提携のもとに生薬の研究を進めて行くべきだと、こんな風に私は考えております。

坂口　いま気賀さんが言われた問題ですが、昨夜も武田で朝比奈先生にお目にかかっているいろいろお話をしていたのですが、朝比奈先生は、ボクは絶対に現代医学の病院では死

の良さを掘り下げようとする学者が少いことは残念です。気賀　そこで、生薬学者と漢方臨床家との提携ですが、そういう点についていかがですか。

木村　そのことですが、漢方薬というのは古来連綿長きにわたって多くの人たちが経験してきているのですから、漢方薬の臨床的結果というものはある程度すでに出ているんですね。ガンなどはいま新しい問題になって来ていますが、むかしだってガンとは書いてなくても、そういう病気はあったわけでしょう。だからそういう病気の状態に対する薬はあったわけですね。そしてある程度の成績をあげて来ていたはずですよ。喘息にしても治療としてむずかしいといっても、西洋医学よりはよく治して来ていますからね。だから、そのようによりよい結果を得ている漢方を、われわれはここでもう一度見直さなければいけないと思うんです。それなのに、いまの新しいデカルト的人たちは漢方なんて迷信だと暴言を吐くのはなさない心持だと思っんです。薬学にしたってそうですよ、あの薬学白書を読んでごらんさない、あんなものは実にコッケイですよ。いかに薬学の間がみんなデカルト式の考えをもつて学問をやっているか、ということがわかるのです。つまり自分たちの祖先の持っていたよい面をもう一度探ろうとしなければいけません。それがためには、薬学も漢方の臨床も

にたかない、死ぬなら漢方で安楽死させてもらえないかとと言われるのです。東大病院に入院したとき、尿道から器械を入れられたり、胃にカメラをつつ込まれたり、人間のからだをまるで自動車か何かの機械を分解するように扱われたので、そういう非人間的な処置に抵抗してボクはわざとあばれてやったよと笑い話をしておられました。そんなわけで昨夜は朝比奈先生すこぶるお元気でしたが、そのように考えておられる朝比奈先生が薬学界をリードして来られたこと何十年、またさらに先ほどから木村先生のお話のように、生薬をほんとうに研究するためには、漢方も鍼灸も知らなければならぬということから湯本先生を訪ね、沢田先生を訪ねられ、また実際にご自分でお灸もすえてみたということですが、この様な漢方に理解のある先生が指導者になっていても、なおかつ漢方というのは、いまはまだ一般に正しく理解されていないんですね。つまり一般の態勢というものは容易に変わらないんですね。だからこれはなかなかむずかしい問題だと思っんです。たしかに薬学の方でもいま分析的の研究に終始していると言われましたが、この態勢を変えろということとはとてもむずかしいことだとつくづく思いますね。

木村　つまり、研究の結果がすぐ数字で出るようなものがないと、手柄にならないような気でいまの連中はやってい

るんですよ。またそういう手柄を立てようなんて思っていること自体がまちがいですよ。学問をするうえでね。

坂口 とにかく朝比奈先生といえは、いまも申しましたように、何十年も日本の薬学界をリードして来られたのですが、その朝比奈先生が研究に対してそういうお考えを持つて当ってこれたにもかかわらず、実際の研究の態勢というものは少しも変って来ていないのだから、仕事というものはそうとばかりは行かないんじゃないですか。

木村 しかしね、たしかにそれはそうですが、僕なんかがこういう方向に進んで来たのは、やはり朝比奈先生が当時からそういう考えを持っておられたからですからねえ。

坂口 すると、まあ徐々に今後そういう人が現われて、極めて徐々に態勢が変わって行く可能性があるということですか。

しかし、いずれにしても、むかしの漢方医はクスリの鑑別とか、修治とかいうように薬学までやったものですが、いまはそういうことはないですね。それでわれわれはいまは臨床だけやっていて、薬学のことについて何か知りたいことに行き当れば、近くに木村先生や高橋先生のような理解を持った方がおられるので、すぐお聞きすることができて、いわば昔とちがってめぐまれた環境にあるわけですね。しかし、われわれ漢方医は、もう少し積極的に薬学の

方とも、さらに広く言えば、基礎医学の分野について連絡をたえずとってやって行かなければならないと思うんですよ。いまのところ、そういう態勢はありませんけど。

高橋 その問題ですが、それは私に言わせればやはり政治の問題に帰すると思うんです。

つまり、医学を批判する政治の問題だと思っんです。というのは、いまの医学は疾患の科学であって、人間自身の治癒というものが次第に疎外されているということで、そういうことは目的としては意識しているけれども、疾患に対する科学であって、人間のものを治してやるということの結びつきをやるといことはむしろ卑俗的であり、ノンアカデミックであるというような漠然とした概念が支配しているからだと思うんです。

木村 だからそういう概念の出發がデカルトなんですよ。

坂口 それで、日本の学問というのは明治に断層があるんですね。デカルトに徹するということは、それはそれでいいと思うんです。西洋の学者というのはそれもあるけれども、歴史があって根が張っているからいいのですが、科学というのは日本では明治期にむこうから持って来たものでしょう。借りものといった感じなんです。日本では科学的と言うと、なにか数字を出したり、表を出したりしなければならぬように思っているんですね。ところが学問と

いうのはそういうことばかりではないですからね。

けさも東京のある製薬会社の人が私のところへやって来て言うには、ドイツのある製薬会社と提携してむこうの薬品を入れようとしているが、最近入って来る薬品をみると、半分以上は生薬が入って来ているということです。それで、それを厚生省へ持って行くと、こんなわけのわからないものが入っているといって厚生省は生薬というとしてんで問題にしてくれないと言ってこぼしていました。

木村 それは厚生省の人がすでに頭がデカルト的になっているからなんですよ。

高橋 ところで医者への使命というのは究極のところ、病因を明らかにすることですが、最終の目的は病気にならないようにしてやることと、病人を治してやることにあるのですが、日本のいまのアカデミックな医学というものは、病人の具える条件において、病氣自身の病因を明らかにすることとか、治療の方法を簡易化するか、あるいは精密化するかというようなことが目的になってしまっって、さっき言われたような人間疎外ということになってしまっったと思うのです。

坂口 究極には病氣を治すという目的を持つてはいるのですが、大学病院の中の雰囲気なんてものは、この間の〇〇のチフス事件の一手手前のようなことはありますよ。ああ

いう危険性はたしかにありますね。

木村 現代医学は感情疎外の医学ですよ。それで僕はかつて印度へ行ったとき、東洋の医学というものは病人を治すのであって、病氣を治すのではない。病氣は治ったが病人は死んだということもあり得るのだ。だからそこをよく考えて、印度にはむかしから伝わっている印度の医学があるのだから、それを科学的に解明して行って、病人不在の医学を人間の医学としなければいけない、ということをやったら、それが印度の新聞に出て、方々から手紙が来ました。つまり印度は正しくあなたの言うようなシステムでいまやっているんだと、大いに賛意を表した手紙をくれました。その点、インドも中国も現代医家と漢方医家は、相提携してやっていますからね。

ところが日本では、大学というところは依然欧米式ですね。しかし最近はずこしずつ大学教授の中でも漢方に理解を持ち始めて来た人がぼつぼついるにはいますが、そうかといって、教授は従来やっていることよって教授としての体面が保てるものだから、どうしても漢方というものも突っ込んで勉強しようというまでには行かないんですね。

高橋 さきほど木村先生が言われたように、一つの薬物の研究開発という問題をとりあげてみても、いまの方法ならば、それを知るためにはまず毒性を知るとか、薬理作用を

知るための動物実験を行なって、そこで、大体これでよからうというので初めて人体臨床実験にかかるわけですね。しかしその期間が短い場合が多いわけですね。それで、それに対する経験というものはまだ不十分な間に、まずまず安全だということから踏み切られると、しばらくそのクスリを使っているうちに、いままで予想されなかったいろいろな悪い条件が出て来たり、予想しなかった毒性があらわれるというようなことがあったのですが、漢薬というものは、最初から素朴な方法で歴史的に人間に提供して、効くもの、効かぬものと、大体において人体を通じてセレクションされて、漢方の臨床家の使っている常用薬というのは毒性においても、その他症候条件に対しても大体の動きはわかっているわけですね。それで、そういうものをなぞもつと用いないかという、やれ新鮮味がなにか水に溶けるものが効くとなれば、その分離がよつかいであるとか、また漢薬は材料的にマス・プロダクションに適しないとか、そういう理由のもとにたえず一線が引かれているんですね。そこで考えますことは最近は何のサリドマイド事件があり、アンプル事件というような問題もありまして、日本のいわゆる新薬化学というものは日本で開発された薬というのは非常に少ないですね。日本で開発されたものといえば、いまはアリナミンぐらいなものではないですか。

天然物化学をやっている人は漢方に興味はなくてやっているんです。漢方なんてそんなものはどうでもいいというわけです。おれたちは新しいクスリを発見するんだという考えですよ。

気賀 つまり構造決定が最後の目的であって、臨床のつながりというようなことは考えないのですね。

坂口 しかしそういうアイデアというか、漢方的な考え方をはじめに持てば、実験的な方法も興味ある問題をつくことが出来ますね。今までの生理学などでわからない面をつけているから漢方は面白みがあるのですね。このころは実験動物はなかなかおもしろくなって来て、ある動物のグリップを作ることができるようになって来たのですね。たとえば、うんと刺激を与えておいて興奮状態にあるような動物とか、非常に敏感な動物とか、いろいろな条件を加えることによって、人間で言えば陽証だとか陰証だとかいうような状態を作ることができるようになったのですね。そうすると、そういう動物を作っておいて実験すればそこに差が出てくるんですね。それで今までのように統計的な画一的なものでなしに、個体差というものを突いて行くことができるわけですね。

木村 いま私のいる富山大学の薬学部には和漢薬研究施設ができて、目下はまだ生薬学的、薬理学的、および生理化

スルファミンにしてもむこうのアイデアで、日本で改良したにすぎないのですね。それで、日本でクスリを開発するにしても、いくら日本で金をかけてもむこうの方が規模が大きいので太刀打ちできず、結局、向こうの薬を買った方が得だというようなことになってしまっているんですね。そこで近ごろは生薬に目が向けられて、なんぞいいネタはないものか、あればそれを開発しようかなどと言ってわれわれのところへ来るんですね。

しかし、漢薬がここまで衰退してしまった現在、材料として最的な生産はともおぼつかないし、漢薬の大部分は中国産に依存しているのですから、いざ政治的に輸入をストップされたら、たちまち漢薬の原料は干上がってしまう状態におかれている現在、これから甘草の栽培をやれなどと言ってもむりな話ですからね。だから漢薬の原料問題の上から言っても、明治時代の漢方弾圧は今にして吾々にひしひしと応えるのですよ。

気賀 ところでここでもう少し薬学の研究について、突っ込んだご意見をうかがいたいと思うんですが……。

木村 薬学でたとえば鳥頭や附子を扱っても、その研究は結晶の出るアコニチンの方へばかり行ってしまっていますから、漢方のクスリとしてやっているのではなくて、科学をやるためにやっている態度ですよ。だからいまの薬学の

学的な部門だけが、将来は附属病院や病理学的部門等も設けてもらうよう当局に要望しています。

坂口 それは一つの橋頭堡ですね。

木村 そうですよ、医学の方にはできなかったが、薬学の方にまずこの橋頭堡が一つできたわけです。それでやがて日本の大学の医学部にも、東洋医学というものをもう一度見直す意味の科ができていいと思うんですね。

高橋 大黃の成分の瀉下作用という問題がいま薬学者の間にとりあげられているのですが、その場合、大黃というのは漢方で言えば、虚実のindicatorみたいなものであって、実証の体質には大黃を与えれば排便があって、気持がよくなるが、虚証の者に与えれば、排便はあるが、虚脱感があって、腹がしぶり、ぐあいが変わるというわけです。

それなら同じ人間でプロキロ(mg/kg・体重)何グラムの大黃を適用しても、人間それ自身の受け入れ側の条件を決めないで実験して、それが医学的に有効性があるかどうかということは、これは問題があるのであって、たえず、実験の対象の薬物が非常に純化され単一化されていても、それを適応すべき例の方も条件が決めてないのだから、薬効とか臨床上の作用というものを論ずることはできないと思うんですね。

しかし中国では、そういった点を認めてやっております

が、その方が、医学を科学化するには正しい方向だと思わ
 んです。それには、それを強力に支持するような政治体制
 というものが日本にも生まれて来なくてはいいかと思うん
 です。つまり人間を大事にする意味で、人間の病気を治し
 予防することが医学の命題だと言うぐらいのはつきりした
 路線が確立されなければいけないと思いますね。

気賀 政治体制というけど、いまの中共はあのように建国
 精神にもえていて、無駄なものは一切省くという建て前か
 ら、生薬の研究も臨床の実際とつながりのないようなテー
 マは一切ダメダというんですが、それは建国の必要から
 やっていることでしょうか。だから日本でもそのようにやれ
 と言っても、日本の事情ではそうは簡単に行かないでし
 う。

木村 だから日本の場合は、学問的にもっと考え直さなけ
 ればいかんですよ。

高橋 日本ではクスリは効いても効かなくても、とにかく
 毒がなくてよく売ればいいという考えから、そういうク
 スリを製薬会社は求めているんですよ。はつきり言いま
 すとね。

木村 何べんも言うようですが、とにかくいまの薬学の行
 き方は、まるで成分を取り出して化学構造をやることを金
 科玉条のごとくに考えていますが、それではいかんですよ。

けです。

しかし、あれでは、なるほど文明開化の資本主義促進と
 という点では先見の明があったかも知れないが、いかにせ
 ん、その余波がいかなるものであるかというところまでの
 予見は、彼はしていないのです。彼はたしかに先見の明あ
 る学者であり、政治家でもあったのですが、人間のことで
 すから、やはりいま言ったような盲点があったと思うん
 ですよ。

木村 西洋で発達した学問を一応評価するということは、
 学問をやる者の責任ですよ。しかし、自分の持っている貴
 いものを野蛮なものとして捨ててしまうということはいけ
 ないですね。コンプレックスを持っている人間というのは
 ダメですからね。

高橋 気賀さんだいたい話が脱線して来たようですがどうし
 ますか。

気賀 盆栽はそこかたわらに自然に生えた雑草の方にむし
 る魅力がある場合もありますからね。

木村 西洋文明に対して、明治時代は学者に限らず、みん
 な日本人はコンプレックスを持っていたんですね。在来の
 日本のものは、なんでも悪いと思っていましたよ。あれ
 がいけないです。だから私は富山大学へ赴任してから、い
 つも学生に言うんです。君たちは、富山大学は田舎の大学

よ。

高橋 現在の開業医はもう既に大製薬会社のセールスマン
 に墮しつつかあるんですよ。

気賀 日本の歯科医は金を売る商人だと、アメリカの歯医
 者に決めつけられましたしね。

西岡 学校でわれわれの習った薬学教育の目標は結局有機
 合成を教えることだったんですね。そして、その有機合成
 を知るためには、まず生薬学というものを先に習って天然
 成分の抽出を行ない、麻黄の主成分はエフェドリンである
 とまず決めてから、そのエフェドリンの構造決定をし、そ
 れからその人工合成を考える。次にはその主成分にどんな
 副作用があるかを調べて、それで悪ければメチル基をつけ
 るなりして、より副作用が少なくて効くものを作る。そう
 いうのが薬学の使命だったんですね。だから、いまから思
 うと、えらく話がちがいますね。

高橋 そうです。それで、十九世紀の後半においてドイツ
 製薬工業は窒素工業から発達して、それによってドイツは
 隆盛におもむいたのですが、長与専斎があちらへ行行って、
 文明開化のためには、早くそこに到達しなければならぬ
 というところから、一薬剤師の学問だとか、漢方医なんて
 ものは予防医学すら知らないのだから、早く廃絶しなけれ
 ばいかんと言って、漢方医学に対するあの改革をやったわ

だという考えを持ってはいかんとね。

坂口 京大ができた明治時代のことですが、当時京大薬理
 の森島庫太先生がはじめて洋行されたとき、ドイツで急行
 列車というものがわからず、同じ距離のところを、金さえ
 よけい払えば、そんなに早く行き着くのには驚いたそうで
 す。つまり急行券という言葉が日本になかったのでしょ
 う。そういう時代でしたから、コンプレックスを持つのも
 ムリないと思うですね。

西岡 さきほど坂口先生は、漢方が衰微した原因の一つは
 明治の断層にあったと言われたようですが……。

坂口 私の言いました断層というのは、学問の断層なん
 ですが、これは漢方にかぎらず、自然科学というものを日本
 では途中から継ぎ木したということなんです。自然に芽生
 えたものではないんですね。だから学問に対する考え方は
 そこに断層があるという意味なのです。

西岡 その点中国では西洋医と漢方医がうまく共存してい
 るようですけど……。

木村 中国にしてもあの開放のとき為政者が漢方を弾圧し
 たんですよ。

気賀 王斌ワンビでしたね。

木村 そうです。ところが、中国では漢方医つまり中医の
 勢力がつかったので、中西医合作ということになったん

ですよ。

高橋 私はこう思うんです。この間日本でも出版された、中国医学概論を見ますと、あれは中国の漢方医学のテキストのようなものですが、あの内容の成立はやはり陰陽五行説が根底となっているようですね。それで、日本の場合は、古方学派の香川修庵にしる、吉益東洞にしる、山脇東洋にしる、カテゴリーにしばらくは、とにかく一応事実を見ようということから、親試実験で、実証性というもの、尊重して傷寒論医学というものを興し、同時に臨床を發展させようという、言わば漢方の復興運動をやったわけですね。ところがその復興運動は漢方医学の復興にならないで、逆にその実証主義精神の運動は文明開化の西洋医学導入のためのレールを引いた結果になってしまったと思うんです。つまり実証主義のレールを敷いたら、その上を走って来たものは漢方医学の列車ではなくて、ドイツ医学の列車が走って来たという現実だね。

だから、カテゴリー理論としての陰陽五行説的中国自然哲学観というものと、いわゆる西洋十七、八世紀以後に発達したアルケミストリーから脱したケミストリーないしは、自然観における原素の発見とか、そのほかウエーラーの無機物と有機物との双壁を破った実験などの考え方には、たしかに坂口さんの言われたような断層があるのでは

ないですかねえ。

木村 いま高橋さんの話のように日本で陰陽五行をやらないうで、もつと実証的に行くこととしたためにレールをオランダ医学やドイツ医学のために引いてしまったようなことになってしまったけれども、また、反面、そのために、日本では陰陽五行的な医学が發展しなかったんだね。これは非常にいいことなんです。陰陽五行ではいまの臨床を説明することはできないですよ。

坂口 つまり机上論になってしまいうんですね。

木村 そうですよ。しかし、あの陰陽五行論はいろんなものを覚えるにはあれはまことに便利なものだね。あれに当てはめて覚えると記憶の便にいいということですよ。

しかし、あれによって病理、生理を論じたらいかんね。ところが、中国の医学はそれが論拠になってしまったんだね。

高橋 そこで、中国の医学の弁護をしなければならんことになってしまったんですが、たしかに陰陽五行説で整理することは明らかに誤りだと思っんです。しかし、整理しようと試みる個々の臨床事実というものは、これは科学的に評価されるだけのものがあるんですよ。

木村 だから、陰陽五行をかりて説明しようとしたとしても、よくなったという事実はあるんですよ。

高橋 それもあります。それから、一番貴いのは治ったという事実、また医薬によって、その使い方を症候とどういう風に結びつけて来たか、ということなどを、無理に陰陽五行説によって体系づけようとしたところに、中国医学の矛盾点があるというだけの話であって、個々の事実そのものの中には、われわれの敬服しなければならない多くのものがあると僕は思っています。

だからその点、こんなことを言っでは亡くなられた森田幸門先生に対してわるいかも知れませんが、忌憚なく言えば、森田先生は漢方を中野康章先生に習ってのち、台湾の医者之王宏仁氏についたため、思想的にかなり変わってしまったので。それで、晩年の森田先生は、傷寒論入門とか金匱要略入門という本を書きながら、われわれに講義として話されるときは、運氣論を引っぱり出されたりして、そのへんどうも低迷してしまわれるんですね。だから森田先生の話を聞いていまの人にはみんなわからないんだね。またご本人もわからせようと努力をされなかったようですよ……。だから阪大でやられた森田先生のあの講義も、傷寒論の初めの方は理解できたけれども、それから次に入ると、観念論に支配されて、わからなくなってしまうという傾向でした。

その点、矢数道明先生ですが、あの先生は森道伯の門で

あって、これはいわゆる陰陽五行説のカテゴリーで体系付けようという派の人でありながら、そういうものから脱皮して行くというムードが見られるのです。その意味から中野康章先生は浅田派で折衷派の人ではありますが、だんだん逆戻りしてしまって、李朱医学派の観念論に陥入ろうとした臨床家でしたが、この両者を考えますと、非常に对照的だと思うんです。

気賀 矢数先生が引き合いに出されましたが、いくらいま漢方がさかんになった、さかんになったと言っても、そういう級（クラス）のエキスパートがあまりにも少なすぎますね。これでは……。

西岡 ちょっと苦しい少数精鋭主義ですな。

高橋 日本は中国にくらべて漢方医は非常に少ないですが、坂口さんとか、こういったハイレベルのクラスの人がありますからね。中国だって、いつまでもいまの状態ではなく次第にレベルアップされつつありますけどね。

坂口 いや、そんなにほめられたって、心細いですよ。いまの日本の状態では……。大学の医学部でなんとかせよと言われますけど、いざ漢方の講座でもできてごらんさない。やる者がないでしょう。

また民間で、漢方の大きな病院でも作ったらどうかと言うけど、漢方をやろうという生徒がそれほどあるかなあ

思うんですね。振り返って見るとまことに哀れなものですよ。いま気賀さんの言われたように、漢方の人材というところに乏しいですからね。

高橋 たしかに日本の漢方は人的資源がとほしいですね。中国ではいま中医は五十万人いるというんです。もちろん玉石混肴の人材でしょうけど。それでもその中で八万人ぐらいいは西洋医学者とはほぼ同等の臨床成績を挙げているということですよ。数から言えば、日本の漢方医三十人ですか、五十人ですか、それとは比較になりませんね。

気賀 それでは、このへんでまた話題を変えまして、つぎに漢薬の製剤化問題についてご意見をうかがいたいと思います。

もちろんもう、いまの段階では製剤化そのものの是非ということについては論じる必要はないと思うんですが、問題はその製剤の過程にあると思うんです。たとえばいま関西では長倉さんや小太郎さんがやっておられますが、もちろん製剤については万全の方法と原料の吟味が為されていると思います。

しかし、数多くのことから、製剤過程において、あるいは原料に何かが一あったとすると、必ずしもいつも同じものができるとは限らないわけですね。たとえば小柴胡湯のエキスなり錠剤の場合、その効力はつねに湯液の場合

合の小柴胡湯の働きが期待されるわけですが、製剤に当たって原料の吟味に何か問題があったとか、製剤中に何か化学変化を起こしたとかそういうことによって、思わぬ小柴胡湯ができたりするようなことはないのでしょうか。

というのは、もちろん長倉さんや小太郎さんのところではそういう心配はないと思いますが、なにぶんいまはインスタントの時代で、患者も医者も忙しい時代で、煎薬などより手っ取り早い製剤の方がいい、という時代の要求から、今後益々製剤漢薬がハバをきかすようになって来たと思いますと、それならオレもそういうクスリを作ってみようじゃないかと、にわか業者が出て来てへんなものを作られたら、それこそ漢薬の混乱を招き、ひいては漢方に対する信用失墜というようなことも考えられますので、この問題にふれてみたいと思います……。

長倉 製剤の問題は生薬の場合と同じことですよ。というのは、漢方で扱う原料、たとえば延胡索にしても芍薬にしても、ちゃんと決まっているわけではないでしょう。

洋薬の場合は、たとえばキナ皮ならアルカロイドが五センチメートルから七センチメートルというように表示してあるのですが、漢薬の場合はそれがありません。それで今日漢方をやっておられるお医者さんは、生薬そのものについてはご存知ない方が沢山ありますよ。たとえば当帰と

川芎と袋が替わっていたら、どっちがどっちやらわからん方が多いんです。そして、小建中湯と桂枝湯における芍薬の分量が三・〇グラムと六・〇グラムのちがいであったら、その芍薬は何を基準としたかと言っても、基準がないんです。それで和の芍薬が値段が高かったら唐の芍薬を使うということになるんです。ですからかえって、製剤化したものの方がコンスタント（一定の品質）だと言いたいんです。

西岡 それは製薬メーカーに眼があれば、という前提をつけたいですね。

木村 長倉さんとか小太郎さんの処ならいいですが、そのほかでいい加減なことをやられたら、これは大変ですよ。

高橋 いま薬学の主流から見れば、いちばん重要である製剤の原料であるところの生薬を知り、その品質を知るといふことに対する評価が、おろそかにされている傾向があるのです。

それで原料は銘柄によって取り引きされているのです。甘草などは、太いのも細いのも、虫の喰ったのも、とにかく甘草は甘草だというわけで取り引きされていること、それから、同じ手の朮であっても、思惑買いをして、半年ぐらい倉庫に入っていたような品とではだいぶ違いを生じますからね。ですから原料の問題は、いまの事情下において

は、需要供給の問題もからんで、やむをえない状態にあるんですね。

長倉 原料だけの問題でなく、乾燥時間の問題とかそういう技術的な問題もあるんです。

高橋 だから、製剤の問題と、気賀さん簡単に言われるけど、この問題は非常に複雑な、いろいろなことが絡み合っているんですよ。

それで、さきほど長倉さんが言われたように、洋薬の方では含有量パーセントと決めることができるが、漢薬の方はそれが無いわけでしょう。そういうあいまいさのもとにおいては、経験ということが貴ばれるわけですね。そして、その経験というのは個人の持つ才能ですからね。そこで客観的条件を決めなければなりません。そのためには生薬の材料の基準を早く決めなければならぬということですよ。それには専門的の知識が必要ですね。

いつか「漢方の臨床」誌（*第一巻第二号に始まる論争）で、防己が問題になったことがありましたね。あの防己問題のとき、おもしろい話があるんです。

というのは、あのとき細野さんにあなたのところでは、防己は何を使っておられますかと問うたら、私とこは千葉の藤平さんが使っておられたようなのは用いていません。私のところではこれですと袋を渡されましたので、開けてみ

たらあにはからんや木防已でしたよ。つまり(同じ)アオツツラフジだったのです。それで、これはやっぱり木防已ですがな、と言いましたら、細野さんは、いやわたしとは、これを使っていてあんな障害など一度も起こりません、と言っておられました。

これはそのとおりなんです。あの藤平さんの件は、偶然のことなんだと思うんです。

つまりアオツツラフジとアオツツラフジとは似てはいますが、アルカロイドの種類が違いますから、全く別ものなのです。しかし、アオツツラフジを使っていて安全であった、アオツツラフジの同量を用いて、あのように変な症状が出たということなのですが、あれはもつと慎重に考えて、偶発的に心悸亢進とかその他何かが起こったのではないかということをもつと傍証的に固めてかからないといけなかつたかと思うんです。それでないと藤平さん級のあいう方があいう発表をなさると、一犬虚に咆ゆれば万犬これに和す^レで、ほかのみんながそう思ってしまいますからね。今日は東京方の学者の批判がよう出るようやけどな。

西岡 そうしますと、あれは結論が早すぎたと言われるのですか？

高橋 そうです。アオツツラフジを使って、二回もああい

す。だから製剤化してしまえば、その心配がなくなるといふこと。

それからもう一つは例の小林一三さんが宝塚の少女歌劇を作られたとき、これから演劇は若い人たちに迎えられるようなことを考えなければ発展しない、ということを書かれたのです。それはたしかにそうだと思ったことです。また日本の文楽は立派な芸術だと、外国人はみんな口をそろえてほめますけど、それではといって、日本へ来た外人で文楽を見る人は非常に少ないのです。

それから、もう一つは原料の問題ですが、現在の漢方医の数が五倍になってどんどん使って行ったら、原料はすぐになくなってしまいますからね。

坂口 いや、漢方医が五倍になったぐらいでは大したことないでしょう。それよりも薬局でしょう。

長倉 いや、漢方医が増えれば、漢方の薬局も増えますからね……。

そこで言いたいことは、製剤化することによって、大体半分以下の原料の消耗で済むということです。

それからもう一つの原因は、注意すればかえって製剤化した方がコンスタントなものができるといふことです。

それで、私は、たとえば葛根湯の製剤したのですが、これは一つの新薬だと思って使って下さればいいと思うん

うことがあったので、テキキリそう思い込んでしまわれたようですが、それは何か偶然のほかの条件が重なったためであったかも知れないことを考えて、心臓病でない人に防已を故意に入れてみて、そういう作用が出るかどうか、もし出なかつたら、もう一度木防已湯を用うべき人を使ってみてその作用が出るかどうか、そこまでやった上で推論をされればよかつたと思うんです。

気賀 藤平先生は、人一倍何事も慎重に考えたり、行動する方ですが、あの場合はいまのお話のように、二回も同様のデータが出してしまったのであのような発表となったわけですね。

高橋 これはまあ藤平さんのことを言うわけではありませんが、とにかく、漢方のお医者さんは、それぞれご自分の使われるクスリに対する認識を持たれたらどうかということなんです。そういう余裕のない場合は、かえって良心的なメーカーの製剤が使われた方がむしろ安全だと言いたいですね。

気賀 だいぶメーカーに旗色がよくなりましたね。

長倉 製剤化の問題ですが、私が漢薬の製剤に踏み切りましたことについては、いろいろ原因と言いますか、動機があったのです。それは一つには原料の規格問題もあります。が、クスリを正しく煎じてくれる人が少ないということ

です。いや煎剤の方がいいという人は煎剤を使われたらいいのでして、私は決して製剤はしていても、それを漢方のお医者さん方に押し付けたりはいたしておりません。煎薬主義で、製剤は絶対に使わないという漢方医もおられますからね。

坂口 そうです。製剤は使わないという人もあつた方がいんですよ。

ところで、この漢薬の製剤を初めてやったのはあれは昭和二十五、六年でしたね。

それは最初武田の渡辺さんのところで作ったのですよ。というのは、東大の薬理の小林芳人先生が胆嚢炎で、旅行するとき、柴桂湯でしたか、何かそういう薬が要るといふので、それではということ佐竹さんが指示して製剤したのです。

そして、そのできたものを私の処へ持って来ましたので、見るとなかなかいいので、それではひとつ、これをやってみようではないかということになったのです。それで日本東洋医学会が創立されたのは昭和二十五年だつたと思いますが、昭和二十七、八年ころその会の事務を私の方でやってくれないかと龍野さんからバトンを渡されたのですが、ちょうどそのときでした、漢薬の製剤はいいから同好の士を求めてやってみようということになったのです。

そして私はその主旨書きを書いて、自分で謄写版に刷って、日本東洋医学会の会員に流したのです。ところがその反響ですが、返事をくれたのはたった一人しかいなかったのです。それは小田原の間中さんでした。これでは話にならない、みんな賛成しないのなら、自分たちでやろうじゃないか、ということ、私のところで作り始めたのです。

たしか学会の第三回か四回るときでした。私は抽出の方法など図を描いて、製剤の方法を示し、その製剤を臨床的に使ったらこれこれの効果があつたという宣伝を兼ねたような発表をしたわけです。ところが、あんなものは漢方ではないといったようなレジスタンスが当時相当あつたのです。

それで、私がドイツへ行ったとき、あんな者を日本の漢方医の代表だと思われては迷惑千万だなどと言ってねじ込んで来た人があつたそうです。もつとも私も日本の漢方の代表だと思つて行ったわけではなかつたのですが……。とにかく、ことほどさように、製剤化の問題に対しては当時低抗があつたのです。

ところが以来十五、六年たつたいまは、当時、そんなものは漢方ではないとえらい見幕で反対した人たちも、大方は製剤を使っていますよ。

気賀 その話では、この間矢数先生と二人で仙台の高橋道

史先生を訪ねたのですが、そのとき、製剤の話が出て、高橋先生が、わたしはそんな製剤は絶対に使っていませんというお答えに對して、矢数先生は、本筋はもちろんな煎剤ですが、製剤も使い方によってはいいことがある。

たとえば、病症によつては始めから煎剤を与えるとクスリが強すぎていけない場合があるが、そういうとき、一応製剤を与えておいて、その上で煎剤をやると、スムーズに行くことをしばしば経験している、という意味のことを話しておられました。そのことはこの雑誌にも掲載されまして……。たけ……。たけ……。

坂口 そういう便利なことがやはりあるんですね。

しかし、本流から言えば、ちょうどコーヒー・マニアが、やはり豆から買って来て挽いたやつでない気が済まんようなもので、煎じることには漢方のほんとうの味というものがあるかも知れませんね。身に合ったほんとうにいい洋服を作るには、やはり裁断させて作るのが煎薬で、ぶら下りのレディー・メードの洋服が製剤だと思つてですが、セミオーダーというか、イージーオーダーというか、まああれぐらいのところでもいいと思うね。そんなところで結構間に合いますからね。へたな洋服屋に作らせるより、イージーオーダーの方がスタイルがよいということもあるから。

気賀 それは痛いね、さつきの長倉さんのお話しの、生薬

を知らぬ漢方医の煎剤より、コンスタントの製剤の方がいいというわけですか。それがもう一つ冗じると、「庸医の手にかかつて寿命を短かくするよりは、湯茶を飲んで寿命を全うするにしくはない」と言つた家康になってしまいますよ。

まあ冗談はさておき、私の心配しますのは、いまお話しのように、コンスタントが期待されるから製剤はいいというところから、製剤漢方がうんと盛んになってくると、こんどは「それなら」というわけがわしいメーカーがどしどし出て来たらどうしますか。それに目を光らす何かがなくはならんと思つてますが……。

それからもう一つの問題は、たとえば大柴胡湯を長倉さんのところで製剤し、小太郎さんのところでもエキスにし、あるいはまたほかでも作るとかいうようにあちこちで製剤しますね。すると、大柴胡湯であることには変わりはないのに、それぞれのメーカーが大柴胡湯と言わずに勝手な名前をつけられたりしますと、使う方は混乱を来たしはしませんか。どこの大柴胡湯でも、大柴胡湯と明示すれば問題はいいですけど。名前の統一です。

高橋 それはたいへんな問題ですよ。

長倉 しかし、それは内容が表示してあるから、見る人が

見ればわかるんですよ。

坂口 しかし、同じ大柴胡湯といつても、すこしずつちがつてくる可能性があるんですね。それが問題だと思つてです。

それで、私のところなどは、臨床に使うための思うように作っていますが、それでも、いつも同じ大柴胡湯ができるとは限らないのです。そうすると、傷寒論に書いてある煎剤の証とはちがつてくるんです。つまりずれてくるわけです。

たとえば、自分でこうだと思つて使うでしょう。思うようにならないで、ほかのものをやってみると、こういうときはこの薬でいいのだなと思ひ込むわけですよ。

次第にそういうことが重なって臨床経験というものができてくるのですが、そうになると、おのずから古典に書いてあつた証とちがつたものができてくるというわけです。そういうことがあるから、同じ大柴胡湯にしても、使いなれるということが必要ですよ。

それと、製剤の場合は煎剤のときのように、匙加減というこまかい芸当ができないから、多少大ざっぱになりますね。

高橋 原料を買い込んで処方を作つて用意していても、それほど患者に使えず、長くおいておくと虫がついたり、い

ろいろで用を為さなくなると、あれは風呂の焚きものにもならず困ることがありますね。

木村 薏苡仁などは安いから、使うときはどうしても1ポンド買わなければならんが、僕なんかほんのちよつとしか使わないうちに虫がついたりして捨てちまうんですよ。

長倉 私のところで、蛇退皮つまり蛇の脱けがらを石油カんに一杯仕入れてしまっておいたのですが、あんなものはそれほど売れるものではありませんから、ほつたらかしておいたのです。それであるものだと思いますが二三年しまつておいて、あるときカンをあけてみたら虫の糞だけ残つてあとなんにもないんです。

気賀 さてそれでは、このへんでまた話題をかえまして、つぎは薬局店頭の漢方という問題についてご意見をうかがいたいと思うんです。何分この雑誌の読者は、医師よりも薬剤師の方々が圧倒的に多いものですから、その方々の期待にこたえる意味でも、この薬局の漢方という問題は重要だと思えますので、その点、漢方の薬局を経営しておられる西岡先生に、ひとつ忌憚のないところをお話しいただきたいと思います。

西岡 近ごろ漢方薬局が多くなってきましたが、その多くなつて来たという現象が、本当に漢方に興味を持つてやりだしたというのなら、これは大いに結構なんです、そう

ではなくて、現在のようにテレビその他マスコミで大衆薬が大いに宣伝され、クスリの大乱売が行われて、従来の薬局経営ではメシが食えないところから漢方に入つて来た者が実際は多いのです。

かく言う私自身もそうだったわけですが……。まあ、漢方に入った動機がそういうことであつてもべつにかまわないと思つてます。問題は、そういう人の中に漢方は儲けるための漢方で、儲かりさえすれば、あとは野となれ山となれ式なのが居るんです。これが困るんです。

たとえば喘息ですが、「喘息には麻杏甘石湯」と割り切つて新聞にチラシを入れるなどの宣伝をして、喘息の患者を呼び寄せて、やつて来たお客には証もへチマもなく、一律に麻杏甘石湯のエキスなり錠剤をやる。こういうことをすれば、なるほど、ふつうのマスコミの製品を売つていよりはマージンはいいし、もうかるわけです。

一方では、たださえ数の少ない漢方のお医者さんが、伝統の漢方医学のよさを一般に見直してもらおうと思つて一生懸命になつていられる大事なときに、他方で薬局が金もうけのための手段としてそういうことをやりだすということは、火をおこしている上で水をかけているようなものです。ですから、この点を少しブレーキをかける必要があると思つてます。

もつとも、そういうことをやるのは、薬剤師をやつてスパーなんかやつていのに多いんですが。これはむしろ、日本東洋医学会というようなものを、もつと大衆の前面に押し出して、その会の会員はそういうことは勿論やらないし、ある程度経験も積んで漢方の何たるかを知っている人であるというように、薬局の漢方をやるという人を選別する状態に行つたらいいかと思つてます。

気賀 いま西岡先生がほんとうにまじめに漢方をやる薬局人と、そうでないのを選別する必要があると言われましたが、その選別はすでにちゃんとできています。というのは、「漢方の臨床」を読んでいるほどの人なら、間違いないと見ているんです。(爆笑) だからこの雑誌の読者が選ばれた人たちですよ。おのずからね。

ところで、それはそれとして、私が薬局の漢方が大事だということについては、もう一つ問題があるのです。

それは、いまいくら漢方が盛んだと言つても、一般の人たちの認識はまだだと思つてます。それで、漢方のお医者さんというものがいることさえ知らない人が多いのですから、漢方のクスリでも呑んでみようかという人は、まず漢方薬を扱っている薬局へ最初に来るといのが大部分だと思つてます。

してみると、漢薬を扱う薬局は、初めて漢薬をのんでみ

ようという一般大衆がまずとりつく、最初の橋頭堡となるわけですから、せつかくそのようにして漢方に入つて来ようとする大衆に失望を与えないだけの、見識と経験を持つていってもらわなければならぬと思つてます。

それにはさつき西岡先生が言われたように、「漢方薬局の選別が必要だし、その選に入るためには、「漢方の臨床」の読者ぐらいにはまずならなければね、というわけです。この筆法で雑誌の宣伝をやりますかな。

西岡 さつき申しましたように、喘息の人になんでもかんでも麻杏甘石湯を売るといふのは、それ自体困つたことですが、それよりも、もつと困るのは、そうしたことが折角漢方に期待をもつて近づいてきた大衆に、漢方はやつぱりアカンという考えを持たせることです。それがこわいんですよ。

気賀 そうなんです。だから漢方の啓蒙運動というのは、漢方医も大切だが、そのまえにまず漢方を扱う薬局の在り方、これはじつに大事なことだと思つてます。

西岡 つまり底辺が大切というんですね。

高橋 いま気賀さんの言われた、薬局の在り方という問題についてですが、これについて、私はちよつと考えを持っているんですが……。

それは、現在の資本主義製薬企業の在り方というもの

は、ご承知のとおり設備更新による量産過程にあるわけですが、設備更新によって量産過程に入るということは、商品に対するコスト・ダウンをねらっているわけですね。そしてコスト・ダウンするその見返りに、こんどはエキスパンション（販売拡大）するという形なんです。

それで私は薬大で長い間学生に講義して来ましたが、いつも言うことは、**クスリ**には二面性があるということです。

一つは、クスリというものは貧富の境というものはないのだと、また、ニグロとかホワイト、またイエローといったような人種的差別もないのだと。病人ならばクスリは必要だし、健康人にはクスリは関心がないのだと、クスリというものはそういう存在なのだ。

そしてまたクスリというものはころばぬ先の杖で、病気にならないための存在でもあるし、病気になった場合には健康に復帰させようというための存在でもある、と。だから、クスリというものは非常に普遍的な、しかも道義的な存在なのだ。

だけどそのクスリというものは、次第に歴史的に変わっていったって、商品としてのクスリというものの性格がクロージング・アップされて来た時代においては、いま言ったような目的はもちろん持つてはいるが、やがて量産過程に入った

状態においては、豊産に合うだけの病人をこしらえないと利潤があがらないのだと。

すると、病人のためにクスリが存在するのではなくて、クスリの生産に合うだけの病人が生産されなければならぬという、いわば逆立ちしたような理論がなり立つてくるのであって、それが、現在の生産競争の激戦を演じる所以であって、このクスリの二面性というものを理解して、学生諸君はクスリを何を以て評価すべきかというところをはつきり考えないと誤りを起こしますよ、といったような講義をやっているのです。

そんなわけで、いまの薬の業界は、量産過程に入った、メーカーの系列化はだんだん激しくなった。月々のノルマを持たされた。ノルマを果さぬうちはお前のところのりべートの特権はなくなるぞ。そこで、ノルマを果たすためにはクスリの横流しをやった、などというようなかたちになって来て、現在の薬局はメーカーの製品を極力売るところの販売機械となり果ててしまっているのです。そこで薬剤師たる者はつくづく、いったい自分はなんのために薬学を学びなんのために大学を出たのかわからないと主体性を見失ってしまったかたちになってしまふのです。こんなことなら大学を出なくても小学校だけの人だっけっこうやれることではないかという悩みをいだけく人も出てくるわけ

ですよ。

ですからいくら主体性をもって自分で行動したいと思っ

ていても、この資本主義社会においては生産手段を確保しない人間は首のない人間と同じですから、そこですこしでも病人のためになるクスリを売りたいという良心のある人は悩むわけです。

そこで、売られているクスリの中で漢方というものはいいものであるから、なんとかしてこれを勉強したいという考えを持つてくれるということは、われわれにとつて有り難いことで、それがさきほど西岡君の言われた漢方薬剤師の一つの立場なんですね。そういう人が大いに漢方を勉強してくれるということは、漢方発展のための大きなプラスだと思っ

それから一方開業医ですが、一般の開業医はどういうことになってるかと言いますと、これはこの間も坂口さんと話し合ったことですが、開業医はいまメーカーのプロパーということにおいて、ただ薬剤師よりも少し、甘やかされているけど、実際には大メーカーのセールスマンですよ。そこにもやはり開業医の悩みが起こっているのです。

気質 高橋先生だいたいデオロギーが出てきましたね。まさに圧倒されたかたちですよ。

長倉 気質さんや西岡さんが心配しておられるような、邪道に入つて行く漢方薬局はたしかにありますよ。しかし、反面、薬局ですくなくとも漢方をやって行こうというほどの人ならば、そう無茶苦茶に、喘息といったら麻杏甘石湯式でなく、なんとか、漢方勉強のためしっかりしたものを読みたいという人が、かなり増えて来ていると思っ

す。それによって、アスピリンをやつてよい人とわるい人、そういう風な観念がだいぶ出て来たと思っ

高橋 そのように薬剤師の日を醒ましてくれたのは、さっきの話しの大メーカーの販売の反動のおかげですよ。（笑声）逆説的に言いますとね……。

西岡 ところがね、漢方のメーカーのプロパーの中には、全然漢方を知らない薬局へ飛び込んで、漢方をやりなさい、漢方はもうかりますよ、宣伝にはチラシのここへあなたの名前を刷り込んで、新聞へ入れなさい、売る品物はこれです、などと言つて廻っているものもいるんですよ。だからメーカーにも反省してもらいたいところがあるんですよ。

それからもう一つ言いたいことは、薬局の中で漢方をやっている人間は頭のいい人間だということです。またそれだけに自信が強くて戦闘的です。私の属する近畿漢方研究会など一匹狼の集りで、討論は実に活発ですよ。

長倉 そうです。事実漢方をやって成功している薬剤師

にさみだれが降りそそいで、樹々のみどりがひととき濃く見えたのはついさきほどのように思っていたが、もう夜はふけて外は真っ暗。こんなに長い座談会をやったのははじめてである。しかし、その長さを少しも感じなかったほど話しがはずんで、実に楽しかった。高橋博士が「またやりましょう」と言ってくださって、これもうれしかった。

最後に、本座談会開催につき格別の御配慮をいただいた、高橋真太郎博士を初め、万障お繰り合わせ、御協力ご出席下さった諸先生方に深甚の謝意を表する次第であります。

(気賀)

は、西岡さんみたいに頭のええ人です。でなかったら、ふつうの人だったら、漢方をやらんでも、よくはやる薬剤師はあるんです。そして店がやらんからひとつ漢方でもやるかという考えで漢方をやった人は成功しまへん。

西岡 そうですね。漢方は泥縄ではダメですね。

気賀 薬局の漢方はいかに在るべきか、西岡先生もつとどうですか。〃思うこと言わぬは腹ふくるるわざ〃で、もつとご意見が出ていいと思うんですが……。

西岡 薬局店頭の投薬はある程度の制限はありますけれど、やはり効くクスリをつくることはできますよ。それにはまず何よりも、漢方をやる薬剤師が勤のいい人間であることが必要になりますかね。

中には理屈だけは言うが、勤のわるい人もいるし、私のように理屈も言うて、勤のええのもありますからね。(笑声)

漢方の将来は知らず、今の段階では「勘方」ではないでしょう。矢数先生のお師匠さんの森先生が書画の鑑定がお上手だったとの話、あれを読んだとき、私はなるほどと思いましたね。

坂口 だから、扁鵲曰く、「病の応は大表にあらわれる」というやつですよ。

西岡 だから、薬局で漢方をやるうというには、勤のいい

ということがまず第一の条件ですが、次には漢方に理解のある医者と連絡をつけておいて、こちらの出来ないことをやってもらいべきだと思います。この二つの路線を外さずにやったら、薬局の漢方は漢方の信用を落とさずに民衆に広めて行くことができると思います。

長倉 理屈も言えるし、勤もいい、という人が出て来たというの、現在活躍しておられる漢方のお医者さんとか、また亡くなった先哲の方々の教えのおかげだと思わなくては。たとえば、虚実のこととかそういう漢方の神髄を惜し気もなく教えて下さったからで、昔なら、秘すべし、秘すべしで、そういうことはあまり公開してくれなかったですね。その点私たちは感謝しなくてはいかんと思うんです。つまり自分の力ではないということです。(長倉社長、大いに力を入れる)

気賀 修身を習っているようですねえ、校長先生に。

さあそれでは、長時間にわたりました、たいへんタメになるお話しを承ることができて、どうもありがとうございます。いまの校長先生のご訓示を結びといたしまして、この座談会を終らせていただきます。(笑い)

(終り)

かくて、七時間にわたる座談会が終わった。窓外の鴨川